

床呂郁哉（編）

トランスカルチャー状況下における

顔・身体学の構築

二〇一六年度基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の研究―人類学におけるミクロ・マクロ系の連関2」公開シンポジウム（二〇一六年―二月九日）



基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求

―人類学におけるミクロ・マクロ系の連関2―

二〇一六年度 公開シンポジウム

床呂郁哉編

トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築

日時 二〇一六年二月九日（金） 一四時～一八時三〇分

場所 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）

三階大会議室（三〇三号室）

基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求

—人類学におけるミクロマクロ系の連関2—

二〇一六年度 公開シンポジウム

トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築

司会 床呂 郁哉 (A A 研)

I 開会挨拶 西井 涼子 (A A 研)

II 趣旨説明 床呂 郁哉 (A A 研)

III 報告

「イントロダクション—文化をつなぐ顔と身体」

山口 真美 (中央大学)

渡邊 克巳 (早稲田大学)

「『私、顔がないんです』ある統合失調症患者者の経験」

河野 哲也 (立教大学)

「顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」

高橋 康介 (中京大学)

大石 高典 (東京外国語大学)

島田 将喜 (帝京科学大学)

「多様なムスリム・ヴェールが伝えるもの—インドネシアの事例から」

塩谷 もも (鳥根県立大学)

58

39

23

13

3

1

「バリ芸能における顔—人形、仮面、化粧」

吉田 ゆか子 (A A 研)

76

IV コメント

原島 博 (東京大学)

北山 晴一 (立教大学)

柿木 隆介 (自然科学研究機構生理学研究所)

105 97 93

V 総合討議

111

基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の

122

可能性の探求—人類学におけるミクロマクロ系の連関2」とは

(床呂) それでは、予定開始時間を三分少々既に回っておりますので、本日のシンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」を開始させていただきます。

私は本日の司会進行と最初のイントロダクションをさせていただきます東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（A A研）の床呂郁哉と申します。本日は平日の昼間にもかかわらず、たくさんの方にご来場いただきまして、本当にありがとうございます。

開始に先立ちまして、今回の企画の主体でありますA A研の基幹研究人類学班代表の西井から一言、ご挨拶させていただきます。

I 開会挨拶

西井 凉子（A A研）

本日は東京の辺鄙な府中の方まで来ていただきまして、ありがとうございます。本日のシンポジウムは、A A研基幹研究人類学班が主催しております。A A研の正式名称は「アジア・アフリカ言語文化研究所」といいますが、人類学と歴史学（今は「地域研究」と言っています）、言語学の三つの分野からなる研究所で、四〇人弱のスタッフが集まっているところです。

この基幹研究人類学班というのは、六年ほど前にA A研のそれぞれの分野で何か顔になるような研究をするべきだろうということで始めまして、第一期が「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」ということで、昨年までの六年間やってきました。

今年度からはそれをさらに焦点化した形で、「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求」を、「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関2」というこ

とで、始めております。昨年度の「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関1」の最終年度までの報告書を、後ろに何冊か持ってきましたが、もし希望があれば、まだ余部がありますので上から取ってきます。

実は昨年度「顔と身体表現に基づく異文化理解」というシンポジウムを、やはりこの時期に行いました。そのテープ起こしをして、まとめた報告書がこちらです。これはAA研の基幹研究人類学班のウェブページにも全文アップしてありますので、興味がおありの方は見ていただければと思います。

私は人類学専門なので、通常、人類学の研究会に出ることが多いのですが、去年のシンポジウムは、心理学の方や他分野の方の報告が非常に面白くて、床呂さんがAA研側として企画に関わってくださっているのですが、去年面白かったので、ぜひ継続してやろうということで、今一度開催することにしました。今回は「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」というシンポジウムで、これから床呂さんから趣旨説明がありますが、今日はまたいろいろな分野の面白いご発表が聞けるのではないかと期待しています。どうか、皆さんも最後まで楽しんでいただければと思います。では、よろしくお願ひします。

写真① 二〇一五年二月開催のシンポジウム「顔と身体表現に基づく異文化理解」ポスター



II 趣旨説明

床呂 郁哉 (AA研)

西井さん、ありがとうございます。それでは、引き続きまして私から簡単に、本日のシンポジウムの趣旨説明をさせていただきますと思います。

(以下スライド併用)

本日のシンポジウムは「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」というタイトルを付けさせていただいていますが、最初にそもそも「トランスカルチャー状況下」とは何を指すのか、少し疑問に思われた方もいらっしゃるかもしれませんので、その説明からです。

ここでわれわれが言っている「トランスカルチャー状況」というのは、一般的には「グローバルイゼーション」「グローバル化」というような通念的な言い方がされる状況とほぼ同じと考えていただいてもさほど間違いではないかと思えます。例えばインターネットに代表されるような電子メディアの発達等によって、文化ないしはそれに関連したさまざまな情報、もちろんそれ以外にも人や物を含めて、そうしたものが地域や国境を越えて、流動や混濁をしていきます。特に文化的な側面に関して注目した状況を「トランスカルチャー的な状況」と名付けています。

こうしたトランスカルチャー的な状況、あるいは一般的には「グローバルイゼーション」「グローバル化」と言ってもいいと思います。このプロセスの中でしばしば指摘されるのは、相

矛盾するかなのような二つの傾向、プロセスが同時に進行しているのではないか。一つは、世界規模での文化の標準化や同質化の圧力と呼べるのではないか。世界中どこでも、例えばハリウッドの映画が流行したり、インターネットで同じようにFacebookに写真をアップしたり、あるいはマクドナルド化などとよく言われます。

もう一つは、これに相反するかのようには、にもかかわらずというか、だからこそというか、世界の各地ではローカルな文化的差異やアイデンティティ、あるいは価値や意味付けといったものを強調していく動きがしばしば指摘されています。一見すると相矛盾するかなのようなプロセスが同時進行しています。

今回、われわれは昨年に引き続き、顔と身体ということが大きなテーマ、対象となるわけですが、顔や身体をめぐっても、例えば標準化と差異化の同時進行ということが言えるのではないかということで、次に一枚、それを象徴する写真をお見せします。

これは私が自分で撮ったのではなくて、フィリピンの新聞に載っている写真をお借りしたものです。私はフィリピンや、主にイスラーム教徒を含む東南アジア島嶼部で調査をしています。この写真はフィリピンのイスラーム教徒の女性で、ローティーンの若者たちです。

写真を見ていただくとお分かりのように、カメラでセルフイーを撮っていますが、恐らくこの後にFacebookなどにアップするのだと思います。面白いのは、そのようにセルフイーを撮ってFacebookにアップするという、欧米や日本でも一般化していることを、フィリピンのイスラーム教徒もやっています。ただ同時に、イスラーム教徒の女性ということで、今日も後半でそのヴェールの話が出ると思いますが、イスラーム的な価値観、規範にのっとったヴェールの着用をしながらセルフイーを撮るといような、顔を隠すことと晒すこと、標準化と差異化が、まさに一枚の写真の中に象徴的に表れていると言えるのではないか。



写真② ヴェールを着用したムスリム女性。

以上は単に一つの例ですが、今回のシンポジウムではこうしたトランスカルチャー的な状況も含んだ「顔と身体表現」に関する学際的な共同研究へ向けた試みとして、位置付けることができるかと思えます。これは昨年度の際にも申し上げましたが、実は科研の少し大きな枠、新領域で同じタイトルにおける研究計画を、今、中央大学の山口真美先生を中心に提案、応募している最中です。その中で、心理学・認知科学・人類学・哲学等の学際的な共同研究をこれから構築していこうということで、日本顔学会の協賛も頂き、昨年引き続きまして、先ほど西井からも話がありました。今回二回目のシンポジウムということになります。

ここから先は昨年の趣旨説明で既に申し上げたことと重なることが多くて、昨年ご参加の方には申し訳ないのですが、心理学・認知科学・人類学等においては、そもそも出発点では例えば、種としての人間のホモサピエンスとしての普遍性への注目という側面も、もちろんありました。例えば形質人類学・先史人類学等を含めて、人類学でもいろいろ細かく分かれます。

しかし、最近では特に文化人類学の場合は顕著ですが、個別の文化的な文脈などに応じた顔や身体表現の意味や解釈、もしくは価値付けといったものの差、さらに表情の基盤となる感情・情動それ自体の多様性などにも注目をしていくという動きも出ています。これは昨年度のシンポジウムでもテーマになった項目かと思えます。今回は、顔や身体表現とその文化との関係に関する、哲学・心理学・認知科学・人類学を含む学際的な問題提起の試みということを一つ考えています。

「普遍性から多様性・文化依存性へ」ということですが、このあたりも実は昨年お話をさせていたいただいたことの二番煎じになってしまっただけで恐縮ですが、例えば心理学に関しては、私

の後に中央大学の山口先生、早稲田大学の渡邊先生から、より詳細な正確なご発表があるかと思しますので、私からはごく簡単に申し上げます。

例えば、ポール・エクマンという有名な心理学の顔の表情に関する研究者は「基本6表情」という考え方を提唱しています。すなわち、人間において、喜び、悲しみ、怒り、嫌悪、驚き、恐れという感情に基づく表情が基本的には共通している、普遍的であるということでした。それに対して、しかしながら、「基本6表情」に関する疑問もその後、提起されています。仮に表情自体はある程度共通しているとしても、それがどのような文脈でどのように表出するのか、エクスプレッションするののかというのは、文化的にも違うのではないかというような話です。

例えば葬儀における感情表現に関しても、日本のお隣の韓国では「泣き女」という存在があつて、非常に激しく悲しみの表現を表出すると言われます。

これに対して、例えば今日も後半の中でインドネシアの話が出てきますが、バリ島においては、これは輪廻転生的な死生観とも関連しますが、むしろ喜ばしい表情をするという例がないわけではありません。

その後、心理学の領域では「基本6表情」の共通性すら疑問視されています。これは山口先生もご指摘されている点です。

さらには人類学の文脈では、感情や情動自体の文化依存性、多様性ということも言われるようになってきています。有名な例では、アメリカの人類学者ミッシェル・ロサルドは、フィリピンのイロンゴットと呼ばれる先住民の社会におけるリゲット (liget) という感情が、必ずしも欧米における悲しみと一対一にきれいに対応しないというような例を報告しています。

こういう文化依存性に絡めて、一つ、これも実は昨年度出した例の使い回しで申し訳ないのですが、「かわいい」というイデオムというか、表現というか、価値観は、普遍的か特殊日本のかということです。これは複数の顔研究者がよく挙げる例の一つですが、例えば日本とアメリカで、子ども向けの人形の顔立ちがかなり異なるということが、山口先生も含めて指摘をされています。

この写真は、上がリカちゃん人形で、下がバービー人形の顔です。写真を見ていただいてもお気づきのように、リカちゃんの方がどちらかというとあだけないというか、子どもっぽいというか、幼児的、赤ちゃん的な特徴をとどめています。それに対して、バービーの方が、大人の、成人女性的な特徴です。写真だと写っていないので分かりにくいのですが、体全体をつくりもバービーの方が八等身的な大人の女性の形をしています。要するに、日本ではこのようにかわいらしさというのが、むしろ子どもの人形にも表れているし、あるいは子どもだけではなく、成人女性に対しても、「あの女性、かわいいね」というのが非常にポジティブな表現として使われています。

なぜそうなのかということの説明すると幾つかありますが、ある研究者に言わせると動物行動学のコンラート・ローレンツの「ペビー・シエーマ」という考え方を流用している人もいます。すなわち、「ペビー・シエーマ」というのは動物の子ども、赤ちゃんの子どもっぽい顔の特徴に関する表現ですが、そうした子どもっぽい顔というのは、その対象に対してそれを守る、もしくは保護し慈しむような行動を、親なり周りの成人個体に対して誘発するのだという考え方です。これを人間に拡張してネオテニー説というものがありますが、例えばアジア人は比較的顔の特徴が、幼形化の傾向が比較的高いのではないか。ゆえに日本においても「かわいい」顔立ちがより好まれるということが言われることもあります。

しかしながら、このあたりは山口先生も指摘されている点ですが、同じアジア系の中でも

「かわいい」というイデオムを、成人の大人の女性に対してまで、ここまで肯定的な表現として顕著に使うというのは、日本ぐらいではないかということですが。

そこで、具体的にアジア各地における「かわいい」という価値観、イデオムの普及の差ということを少し考えたいと思います。

次のスライドも昨年と同じ使い回しで申し訳ないのですが、これはインドネシアとフィリピンにおける現地のアイドルユニットの写真です。左側はインドネシアのJKT48です。これはご存じの方も多いと思いますが、知らない方も名前を聞いてぴんとこられたのではないかと思います。日本のAKB48の秋元康プロデューサーが現地で立ち上げたインドネシアにおけるご当地アイドルユニットです。非常に現地でも人気が高く、日本製の商品のCMなどにも起用されて、割と人気があります。

右側も日本の「かわいい」カルチャーに触発されたグループで、名前も「Kawaii5」という五人組のアイドルユニットですが、恐らく初めて名前を聞く方が大半ではないかと思えます。人気がないわけではありませんが、それほどものすごくメジャーであるというわけでもありません。ちなみにフィリピンではMNL48が発足するという話を今年前半ぐらいから聞いていたのですが、結局まだ、正式には発足していないようです。

ここでポイントですが、何が言いたいかというと、今、例に挙げたインドネシアとフィリピンは、形質人類学的には割と共通性の高いマレー系の顔立ちであると言っているかと思えます。しかしながら、「かわいい」という価値観というか、イデオムに関しては、その人気が普及度に顕著な差があると言って、ほぼ間違いありません。これはよく言われるのは、フィリピンにおいては、五〇年ほどアメリカによる植民地統治の影響があり、現在でもフィリピンではどういう女性の芸能人が人気があるかという点、より大人の女性的な顔立ちもそ

うですし、スタイルも八等身のハリウッド女優的な顔や体の女性芸能人の方が基本的に人気が高いのです。

それから「かわいい」に関してもう一つ余談ですが、今度はマレーシアの例です。これは今年、クアラルンプールに行ったときに現地で売っていて、「これはシンポジウムで使おう」と思っ買ってきたのです。マレーシアにおいて、日本発の **Kawaii** 文化や、おたく系の人がよく「萌え」という表現を使いますが、絵柄を見ていただくと分かるように、少しそういう **Kawaii** 文化、もしくは「萌え」的な絵柄を使っています。これはスライドにも書きましたが、マレーシアのムスリム、イスラーム教徒の少女向けの行動指南書です。すなわち、どのような化粧やアクセサリー、ファッションをすればいいのか。あるいは、どういうセルフィーであれば許容範囲であるのか、イスラーム的に正しいのかということ解説した本です。この手のものが、例えばマレーシアに行くときと本があるということです。

シンポジウムの後半では、イスラーム教徒のヴェールの話なども詳しくあると思います。文化としての顔・身体加工・変形・装飾・化粧というものが今度はテーマになっていきます。すなわち、顔や身体の皮膚表面の加工・操作・装飾としての、化粧・刺青・衣装・仮面・装身具といった問題です。なぜ人間がこうしたことをするのかという点に関して幾つか考え方がありますが、有名な人類学者のレヴィ・ストロースは、要するに人間（ホモ・サピエンス）が、自然と対立する文化の存在として、身体加工なり、化粧なり、こうした装飾を施すのだということを言っています。写真で写っているのは、レヴィ・ストロースが研究をした南米の先住民社会における顔の刺青です。

それから、化粧はもちろん、日本を含めた現代でも非常に一般的ですが、語源的にしばし



写真③
マレーシアにおけるムスリムの女性向けの
指南書

ば言われるのは、化粧というのにはコスメティクス、それはすなわち、宇宙 (cosmos) と身体との照応関係に基づいた、ある種の呪術的な行為であるということも人類学の文脈では指摘されたりします。恐らく、今、お化粧をする日本の女性が呪術的行為ということを普段意識することはあまりないと思います。

例えば、また東南アジアに戻りますが、つい最近、私がフィリピンの調査中に撮ってきたのですが、これはキリスト教徒の事例です。生後数カ月の赤ちゃんの額に染料や市販のリップスティックなどを使い、十字架を描くのです。乳幼児というのはご存じのように病気などで死亡率が比較的高いということで、魔除け、さまざまなスピリット、悪しき霊から守るという意味合いでやっています。

こうした問題の続きというか、「顔・身体の隠蔽と『顔隠しの文化』」という話を少ししたいと思います。これはシンポジウムの後半のテーマですが、世界の各地で顔や身体を隠蔽する、もしくは代替するような文化が報告されています。一番有名なのは、イスラーム文化圏における女性のヴェールです。下側の写真はフィリピンのイスラーム教徒で、上はバリ島の仮面です。このヴェールと仮面についてはシンポジウムの後半で塩谷さん、吉田さんからご報告があると思います。

面白いのは顔研究の文脈では有名な話で、この会場ではご存じの方も多いと思いますが、日本も伝統的には顔隠しの文化があります。すなわち、顔や体の存在感を明確にさせないような美意識というものが、かなり一般的にあったのではないかと村澤博人先生などが指摘されています。具体的には、日本の着物というのとはできるだけ身体の凹凸を消去するような方向性で、言ってみればボディコンシャスの反対側のベクトルというか、ボディアンコンシャ



写真④ 額に魔よけの十字架の徴をつけた赤ん坊。フィリピンにて

スを目指すような被服文化です。

化粧も、どちらかというと、江戸期まではむしろ素顔を人前で見せないための礼儀作法という意味合いがあったという指摘がされたり、さらにさかのぼると、中世の日本では、貴族の女性は自分の夫以外には顔を見せなかつたということが指摘されています。ということ、何もイスラーム圏やバリ島といったエキゾチックな異文化の話ではなく、日本も含めたさまざまな顔の隠蔽や顕示をめぐる比較研究にも可能性が開けるのではないかと考えています。

以上、申し上げたのは、あり得る多様なトピックのほんの一部分で、恐らく、本日のシンポジウムでは今、挙げた以外にもさまざまな問題が取り上げられるのではないかと思います。

プログラムを簡単に紹介させていただきますと、私に引き続きまして、中央大学の山口先生、早稲田大学の渡邊先生から「文化をつなぐ顔と身体」ということで、イントロダクションを心理学・認知科学のお立場からさせていただきます。引き続きまして、立教大学の河野先生に哲学的視点で顔をどう考えるかというお話で、問題提起をしていただけるのではないかと思います。

そして、さらに前半の最後のご報告は三人のチームで、中京大学の高橋先生、東京外国語大学の大石先生、帝京科学大学の島田先生のグループが「顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」ということで、高橋先生のグループはある意味で、ちょうど文化人類学と心理学、認知科学を架橋するような、非常に興味深いフィールドワークと実験研究を接合するようなご研究をされていますが、それに関するお話があるかと思えます。

休憩時間を挟みまして、後半は鳥根県立大学の塩谷もも先生から、先ほども少し取り上げ

ましたが、インドネシアのイスラーム教徒の女性のヴェールに関するご報告、そして最後にAA研の吉田ゆか子さんです。吉田さんは昨年もシンポジウムでご報告をされましたが、昨年に続きまして「バリ芸能における顔」ということで、人形や人形劇あるいは仮面劇、化粧に関する報告をしていただきます。

以上の報告を受けまして質疑応答ですが、今回コメントターの先生方を三人お招きしています。東京大学の原島博先生はご存じのとおり、日本顔学会の会長を務めていらっしゃる顔研究の第一人者という先生です。それから、立教大学社会デザイン学の北山晴一先生、自然科学研究機構生理学研究所の柿木隆介先生に、それぞれのお立場である社会デザイン学、神経科学の視点からのコメントを頂くことを予定しています。そして、最後に総合的なディスカッションということで、終了は六時半前後ということで大変長丁場になりますが、どうか今日は最後までお付き合いいただければと思います。

以上、大変雑駁な話になってしまいました。私からの最初のイントロダクションは以上で終了させていただきます。

時間がありませんので、引き続き、早速で恐縮ですが山口先生と渡邊先生のお二人から、今度は心理学・認知科学の立場からのイントロダクションをお願いしてよろしいでしょうか。では、山口先生、よろしくお願いたします。



写真⑤ バリ島の仮面

Ⅲ 報告

「イントロダクションー文化をつなぐ顔と身体」

山口 真美（中央大学）
渡邊 克巳（早稲田大学）

（山口） 中央大学の山口です。皆さん、今日は金曜日の午後にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

これは昨年度の「顔・身体表現に基づく異文化理解」のシンポジウムのポスターです。非常に楽しい会で、こうした機会を与えてくださった西井先生、床呂先生、本当に深く感謝いたします。そして、今年もまた、楽しい会になったらと思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。

私どもは心理学の立場から顔の研究をしてまいりました。今日、コメンテーターとして来ていただきました柿木先生とは、数年前まで新学術領域の複合領域で「顔認知」をやらせていただきました。昨年度からこういう機会を頂きまして、文化人類学の先生と新しい視点で顔について何かできることはないかということを計画しながら、楽しく新しい計画や顔について話し合う機会を設けさせていただくことになりました。

今日は渡邊先生と報告させていただきましたが、私の方は今まで心理学の中で顔がどういう研究をされてきたのか、少しだけ話しさせていただきます。渡邊先生に引き継ぎたいと考えています。非常に短くまとめさせていただきます。

(以下スライド併用、#はスライド番号)

#2

顔というのは、非常に古くから私たち人にとって興味のある対象でした。では、顔研究をさかのぼり、どのようなことがあるのかについてお話しします。古代ギリシャの人相学の画像もネットで調べると、このように画像をアップしてくれている人がいるのだなど、あらためて感慨深く思います。中国もさかのぼると古いのですが、古代ギリシャでは、特に人の顔と動物の顔を比較して、人間の顔を「この人は牛みたいに見える」「ライオンみたいに見える」、そうすると性格が似ているのではないかというような、今から思うと非常に素朴な感覚ではありますが、やはり人の顔とその顔から受け取る印象というのは、非常に興味深く研究の対象になっていたわけです。

#3

さらに、そこから顔の研究がどのように人の興味を引いたのかさかのぼっていくと、歴史的に見ると一六世紀は骨相学が大流行しました。顔というよりは頭蓋骨も含めた人相のようなものですが、こういう頭の形をしていると知的であるとか、性格がどうだという研究も盛んに行われました。私たちは人の身体や風貌に非常に興味があつて、先ほどのギリシャ時代の人相学というのは、今から思えば非科学的に思えるかもしれませんが、その時代はそれぞれの生物の性質をきちんと科学的に捉えようという気持ちがあるか、その奥底にはあつて、頑張つて何らかのことを捉えようとしています。科学的な試みなのですが、非常にみんなの興味を引くために大流行してしまつて、その話がどんどん先走つてしまつて、「それって本当に科学的なの？」という烙印を押されてしまつたところもあります。

#4

一方、先ほど床呂先生からお話がありましたように、表情の研究というのはまた少し違う流れで行われているところもあります。さかのぼってみると、ダーウィンが『人及び動物の表情について』という本を一八七二年に出版していて、表情の生得的なベースというのはダーウィンが根幹にあります。つまり、動物の場合は人間ほど顔に情報は特化していないので、身体全体で喜びや怒りを表出するわけですが、それが私たちヒトでは顔に特化してきました。その顔で表す表情は動物と一緒なので、基本的な表情は動物と同じ、こういう統一的なものなのだという考えがあったのです。

#5

その考えが先ほどもお話しされましたように、Paul Ekman の基本表情、文化を超えた共通性を持つ表情があるということ、それは例えばチンパンジーと比較してみると、チンパンジーと似たような表情もある、私たちヒトは共通祖先を持って表情を系統的に受け継いでいて、文化的に共通ということ、Ekman はいろいろな文化にいつて表情を分類させて、基本的な6表情は共通であるということになっていきました。

今日、渡邊先生からお話があるかもしれませんが、こうした表情の共通性については、またさらに違う方法でデータを蓄積することによって、少し違うのではないかという話も出てきたところです。つまり、ここでは例えば、どういう表情に分けるか、言語で報告していません。それを言語ではなく、表情のどこを注目するかという眼球運動に注目して解析したところ、文化差が見えてきました。私たちはひよつとすると意識しないところで、文化差というものを持っているのではないか。そういう心理学や認知科学的な知見を持って、心理学と文化人類学と一緒に研究ができる機会がないかと考えて、昨年からこういうシンポジウムを重

ねさせていただいているところです。

#6

もう一つ、最近の流れを少しだけお話ししますと、今日、原島先生も来ていただいておりますが、顔研究の現代では「平均顔」ができました。これは原島先生がつくられた平均顔システムで、顔の合成ができるようになりました。自動的に顔の表情、例えばこれは笑顔シャッターだと思いますが、笑顔が分かる。人の顔が分かる。これはもう、皆さんのFacebookやスマホのアプリで簡単に手に取って使うことができ、技術が非常に躍進して、身近な存在になってきました。

それともう一つ、今日、柿木先生もいらしていますが、顔認知の背景となっている脳の仕組みも明らかになっています。このような現代的な知見と過去からの疑問が結び付き合いながら、顔研究や表情研究が展開していくきっかけになればと思います。

#7

最近の研究を少しだけ説明すると、平均顔を使って美人とはどういう顔か。いろいろな顔を合成することによって、例えば健康的な人と不健康な人を平均化すると美人が出てくる。進化的に私たちはどういう人を魅力的と思って、どういう人が子孫を残す進化と結び付いているのか。あるいは社会で魅力的な人が子孫を残すということが、進化的にヒトと動物との結びつきを重視する考え方とすれば、その一方で、より複雑な現代社会では魅力的かどうかよりも、その人が信頼できるかどうか、あるいは有能かどうかが重要な基準で、それにより選ぶターゲットが変わってくるわけです。

それも顔で決まる可能性があるという研究もあり、それは何となく前の方のギリシャ時代

に出てくる人相学と似ているようなところがなきにしもあらずな。そういう私たちの興味の原点というのはこんこんと続いて、研究の中に流れていくのではないかと思えます。こういう過去の知見、現在の手法、いろいろなことをミックスしながら、いろいろな文化の中の顔の使われ方を研究するきっかけになればと思っています。

私は今のような歴史的な流れをお話ししましたので、渡邊先生から今の話をよろしく願います。

(渡邊) 早稲田大学の渡邊と申します。私自身、それほど顔に興味があつたのか、文化に興味があつたのか、身体に興味があつたのかというと、なかなかはつきりとした出どころは分からないのですが、結構、昔からそれなりに興味があつたと最近気付いてきました。去年ぐらいから、顔と文化、顔と身体という話にある意味、巻き込まれるような形になってきて、だんだん自分の興味が分かってきたという経緯があります。

#2

去年来てくれた Roberto Caldara という方の研究ですが、要は基本6表情というもので、ある表情を観察したときに、弁別できるのは当たり前なのですが、その見方が違って、センチビティが違うという話があります。例えば、ある人の顔を見ているときに、アジア人と白人の方では全然見ているところが違うにもかかわらず、同じように「これは笑っている」「これは怒っている」というのが分かり、これは誰だということも分かるのですが、見るストラテジーが違ってきます。

例えば日本人やアジア人は顔の真ん中を見ていると。よく眼球運動の、目を見て、鼻を見て、口を見てという三角形の動きというのは、西洋人にしか出ないというのが彼の研究だっ

たわけです。

#3

この後、結構、この手の研究がたくさん出てきて、動画だとうなるのかという話では、実は西洋人でも三角形を追わず、みんな顔の中心に視線が集まることなどが分かりました。他にも、目の前に本当の人がいる場合と、写真を見た場合の目の動きは全然違うという話があつて、そういう話がどんどん出てきました。

目を見るのが怖い人、例えば自閉症気味の人やいわゆる「おたく」と呼ばれている人などは、写真なら目が合っても全然怖くないので、見ることができのですが、実際にその人の前に出ると、目が合わないというが出てきます。そうすると、実際に本当に目の前に人がいる場合と写真では、全然話が違ってくるわけです。

私とその後の文化人類学や哲学の話を聞いているときに面白いと思つたのは、われわれ実験心理学者は今まで実験室の中でコンピューターに顔写真を写して、「これがどう見えるか」という話ばかりしてきました。「顔写真の研究ではなくて、顔の研究するにはどうすればいいのか」となったときに、こういう広がりが必要になると個人的に思つていました。

#4

顔の記憶の研究を、そこにいる松吉君が始めて、顔が何個覚えられるかという話を去年しました。実は昔から研究があつて、自然画像というのはほとんど無限に覚えることができ、いくらかでも覚えられますが、顔をどのぐらい覚えられるかを調べた結果、「一〇個」というすごく不思議な数字が出てきました。視覚的ワーキングメモリーだと「三〜四」なので

すが、この顔の「一〇」というのは一体どういう根拠があるのか。実はこれは結果として出ているだけで、解釈はまだできていません。

#5

例えば、Other-Race Effect のような形で、顔の記憶が文化によって影響を受けるのかを調べた研究も多くあるのですが、実はこの Other-Race Effect 効果量が小さいのですね。さらには、効果量が、年代ごとにだんだん小さくなってきているという話もあります。

#6

もう一つは、先ほどおっしゃられたように、ヒトは他の文化にさらされる機会が多くなつてきています。大昔は、他の人種を見ることはまずありませんでした。さらに、メディアの発展と浸透によって、最近たくさんバラエティのある顔を見るようになってきたせいで、Other-Race Effect が弱くなっている可能性もあるかもしれません。

ここで言う文化というのは、純粹に地域差としての文化差だけではなく、歴史的な変化も含みます。顔の見方は今、この時代だけを切って調べるというのではなく、歴史的な考え方が必要だろうと個人的には思っています。

#7

去年もそうだったのですが、話していると時間がなくなるのがいつものパターンなので、この辺は全部飛ばしますね。

昔、三十三間堂の仏像の顔を調べるとい研究をやったことがあります。実は仏像の顔を調べるのはなかなか難しく、基本一体一体違うので、それを調べてどうするという話です。

三十三間堂には似たような仏像がいっぱいありますが、同じように作ろうとしたのですが、微妙に違っていているのです。この仏像を写真に撮って、それぞれの表情を調べてみようという話です。

まずやりたかったのは、そもそもこの顔はどう見えるのかということ調べます。男性か女性か、年齢は何歳ぐらいか、感情はどうか、仏像はこつちを見ている気がするかなどいろいろ聞きました。いろいろ話ができるのですが、今回紹介したいのは文化差だけに特化した話です。

まず、表情の認知のようなものは、日本人とアメリカ人では非常にきれいに相関します。顔の弁別に関してはユニバーサルで分かるのですが、実際にどういう顔が好きかという話をする、日本人の方が、表情の影響が少し強く出ます。おそらくアメリカ人にとっては無表情に見えるのですが、われわれにはそれなりに表情があるように見えるのでしよう。これが Other-Race Effect かどうかは分かりません。われわれが仏像をよく見ているからかもしれない。

8

これは、日本人に一番好かれた仏像五体です。こちらはアメリカ人に一番好かれた仏像五体です。怒っていたり嫌悪感を示しているような顔は当然、嫌われます。アメリカ人も日本人も好きな顔は当然、基本的にはハッピーな顔です。もう一つは *sadness* で、悲しそうな顔をしていると好まれたりします。

9

実はここで、この二つの相関を調べました。これは少し説明するのが面倒なので飛ばし

ますが、日本人だと *sadness* と *happiness* の間に相関が出ます。どういふことかというところ、悲しくて同時に幸せそうだという表現をすることが可能なのですが、アメリカ人の場合は逆相関する傾向があります。Happy だったら、必ず sad ではないのです。その意味で、表情の認知というときに、先ほどの「6表情の中から一個選べ」と言われたら選べるのですが、「もう一個選べ」と言われたら、日本人の場合なら、選べる顔があるはずなのです。そのときに先ほどの話に出てきたような怒りと悲しみが混じった感情が一つの基礎的なものとして存在する可能性もあるかと思ったりしています。

#10

もう一つ、最後に少しだけ言いますが、うちの大学院生がやった研究で、目だけの魅力度、鼻だけの魅力度、口だけの魅力度のようなものが、時間的にどのように最終的な顔の魅力に貢献するかという研究があります。これは先ほどのムスリムのヴェールの話と同じなのですが、目だけで魅力度を判定しなければいけない状況が存在するときに、一体そこにどれだけの情報があるのか。

もう一つは、その情報はどれぐらい、「本当の」と言うとおかしいのですが、顔全体の魅力度に影響を与えるかという研究も可能で、それを見るとまず、隠された部分のある顔の方が、明らかに魅力的なのです。目だけが魅力的、口だけが魅力的なのですが、それが統合されると、だんだん弱くなってきます。それぞれの貢献度のようなものを測ると、目は立ち上がりが強くて、最初から顔の魅力度をピシッと決めます。これがまさにデフォルトであって、その後、鼻や口の魅力度がだんだん加えられて、顔全体が、どれぐらい魅力的だと言うことができたりするわけです。

#11

今度はこの時間的な統合過程、一秒の間にどのように顔の魅力度が上がっていくのか、イス人と中国人と日本人で比較して、細かいところを見ていこうと思っています。

#12
#13

もう一つ思うのは、本当に対面状況になったときに、人はどのように魅力を感じるかということです。これには、文化人類学のノウハウがすごく必要になってきます。われわれは、刺激を提示するのは得意なのですが、そういうのを解釈するのはなかなか苦手なので、そのあたりを組み合わせた形で研究が進んでいくと面白いかと思っています。

研究の話はここまでなのですが、私がこのようなシンポジウムに期待していることはまさにそういう話で、われわれ心理学者が研究室の狭い実験室の中でコツコツやっていたことを結構、ガサツと裏返すようなものが出てくるような気がして仕方ありません。この研究をできれば来年から五、六年ぐらいやって、新しい領域のようなものをつくることができれば面白いかと思っています。

(床邑) ありがとうございます。

それでは河野先生、ご準備の方はよろしいでしょうか。個別の方へのご質問等があるかどうかと思いますが、最初のプログラムのところで紹介させていただきましたように、最後にコメンテーターの先生方とのやりとりの後に、総合討論させていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

「私、顔がないんです」ある統合失調症患者の経験

河野 哲也（立教大学）

こんにちは。立教大学の河野と申します。よろしくお願ひします。少し遅れてまいりました。それで早く帰ってしまうという大変失礼なことをするのですが、今日は最初にキックオフ的なシンポジウムということで、お話をさせていただきたいと思います。

今日のお話は、自分で五年前に書いた『エコロジカル・セルフ』という本の中の話をかいつまんで、新しいものを準備する時間がなかったもので、その復習のようなつもりでいます。ただ、これは五年前に出版されて、さらに数年前に準備したので、もう一二年ぐらい前の話ですので、若干古いかもありません。自分としてはここまでで、これから皆さんと一緒に勉強させていただきたいと思っるところです。

「私、顔がないんです」という話ですが、私の専門は哲学で、メルロ＝ポンティで博士論文を書きまして、身体論や心の哲学、現象学といったところが専門です。久々に専門領域でお話を頂いて、うれしく存じます。

#2

今日の話ですが、「近代的な主体」とよく言われるのですが、私たちが普通「心」と想定しているものがあって、これがさまざまな学問、心理学でもそうですが、認知科学なども基本的な考えの枠組みになっていると思います。それと体の関係を考えるという、先ほどの話から考えると大ざっぱな話なのですが、それをしていきたいと思ひます。

「私、顔がないんです」というのは、統合失調症の患者さんの非常に面白い、面白いと言っでは何ですが、本人は苦しんでいらっしやるので面白くはないのですが、興味深い経験につ

いての解釈とお話をしたいと思います。その次は、表情というものといわゆる心との関係についてお話をさせていただくという形の流れになっていきます。

#3

さて、心の哲学や現象学では、心ということ扱うのですが、心というのは昔からよく皆さんが英語を勉強すると、mindと心は、かぶる領域が違うというのはお分かりだと思います。shoulderと肩も同じではないと思います。「肩が凝る」とは言うけれども、英語だとstiffed neckです。「イチローは肩が強い」と言いますが、あれはstrong armで、そうするとshoulderと肩は同じではありません。近い共通の部分をはいるけれども、基本的に別のことです。

それと同じように、心と言われているものも、文化で指すものが随分違います。似たり寄ったり、何か共通の部分は少しあるかもしれませんが、日本語の心とmindは違うし、mindとsoulは違うし、西洋の文脈で一応、私の西洋哲学の専門になると、例えばanimaという言葉です。古代ギリシャというのは、西洋人は自分たちが直系の子孫のように思っています、全然別の文化であり、例えば「プネウマ」といったものだと、むしろ、「気」のような考え方と近いかもしれません。人の心ということで何を指しているのか、心理学の方たちは、「行動を研究している」と言っていたらとそれで済むのですが、何を指しているかは非常に難しい話です。

私たちは心というと、そこに大体、「働き」と考えているのではないのでしょうか。心理学の全集を見てみると、最初の第一巻は「感覚・知覚」、第二巻「認知」、第三巻「記憶」、第四巻「感情、思考、人格」などと出てくるのです。人格はちょっと働きとは言えないかもしれませんが、他のものは全部働きというか、ファンクションという感じがします。人間の心

というのは、ファンクションの統合体であるという考え方が多分、近代的な考え方ではないかと思えます。

この基をたどるのは難しいのですが、よく言われているのはデカルトやロックという、一七世紀ぐらいの哲学者たちが、その考えの基礎をつくったのではないかと思えます。

そうすると、それを統合して束ねたものを *person* と言っていて、それを人格と言いますが、日本語だとやはり若干、道徳的な意味が入ってきますが、そのようなことになるのではないかと思えます。そうすると、不思議なことに心はファンクションの、*function* は「存在」のように関数のことですから、入って出ていく、変換過程であるという感じになりますから、どうしても働き一辺倒になり、心というのは何か働いてなんぼのものであって、受け身のものが無いという感じになっていきます。特に例えば、記憶というのは思い出すという動詞だし、思考は考えるという動詞で、感じるは感じるという動詞なのです。全部動詞で従って、そういう能動的な働きが出てきているという想定がどこかにあります。これを疑ってみようということです。

#4

そこで突然ですが、これはマドリードのプラド美術館にあるデイエゴ・ヴェラスケスという画家の「宮廷の侍女たち」という有名な作品です。これはご覧になった方もいらつしやると思いますが、結構大きな絵です。この絵の前のある一点に立つと、ここに侍女たちと画家がいるのですが、この視点が一点に集中してくる場所があるのです。結構、大きくて、引いて見るとここだという感じで、視点が集中している場所があるのです。そこに立つと、あの後ろに大きな鏡があつてカップルが写っていますが、あれが本人、自分であることが分かるのです。つまり、あそこに写っているのは王様とお妃様で、お妃様が部屋に入ってきたので、

自分の娘と侍女たちが一齐に目を向けたというシーンだと考えられるのです。

これは何かというと、ミッシェル・フーコーという人が取り上げたので有名になりましたが、実際に目の前に立つと、見られている感が強くて面白いのです。絵として奥行きがあるという絵は、ヴェラスケス以上にうまく描いている画家はたくさんいるのです。それはどちらかというと、平面の後ろに何かたくさんつながっていて、だからここでバツンと切れています。ところが、ヴェラスケスの絵の前だと、大げさに言うと、ガーツと押し寄せてくる感があります。ちよつと行ってみてください。そう聞いて行ってみると「それほどでもないぞ」と感じるかもしれませんが、虚心で向かい合っていたいただきたいと思います。

#5

それはどういうことかというと、この絵では実際に王様とお姫様、見ている者である私たち鑑賞者も見られています。これがすごく強く感じられる絵です。ヴェラスケスは面白いことにデカルトと同時代の人です。何年かずれているのですが大体同じで、デカルトは割と早く死んだのですが、ヴェラスケスは後です。

この絵で描かれていることはフーコーも少し言っていますが、見ている者も同時に見られているというのを強く感じる面白い絵で、独特の立体感を持っています。この立体感を出しているのは、絵の中の人物の視線で、奥行きではなくて、前に出てくる。

一方、近代的な主観概念というのは、先ほど言った能動的であって、決して見られない。働く一方で、決して受動ではない。受動的なのは体の方である。つまり、能動的な心と、受動的な物体である体、この組み立てで近代主観概念はできているのですが、面白いことにこの絵は、デカルトがそのようなことを言ったのと同じ時代に描かれたのです。

デカルトが言っているような近代主観概念は、全て能動的なので、自分から眺めることは

あつても、眺められることはないということ。「絶対的な主観」といいますが、そのようなものとして、ロックとデカルトというのは近代的な心の概念を準備したわけです。でも、ヴェラスケスはそれと全然違ったものを、実を言うと同じ時代に描いていたという注目にできます。詳しく知りたい方は、『言葉と物』というフォーコーの分厚い本を読んでもいただければいいと思います。

#6

さて、顔ということですが、顔というのは当然、受動性の象徴ではないか。自分の顔を直接見た方はいらつしやらないと思います。カニなら別ですが、われわれは鏡を使わないと自分の顔を見ることができません。自分の体を触ることができるし、体が柔らかい人は隅々まで触ることができるし、マイクروفフォンで拾った自分の声を聞くたびつくりたりするので、一応、自分の声が聞こえているし、自分の匂いも分からなくなったりしますが、一応嗅いでいるわけですが、顔に関してだけは絶対に自分では見られない。当たり前のことですが、外を向いていて、他者を向いています。

子どもというのは、最初に他者の顔を認知します。これは心理学でよく言われていることなので、あえてここでは詳しく言いませんが、自分の、例えば笑っているというのは自己受容感覚で、ニヤッと笑っているような形と、向こう側の他者に出てきた笑顔で、「笑顔」という概念というか、言葉ではないですが、そういうまとまりを作っていきます。笑顔というのは、自分の中の何か内的な感覚であると同時に、外にある他者の顔をくっつけた複合的なものとして考えていいと思います。

これが哲学的に見ると、顔の面白さではないかと思えます。こうしたことは先ほど言った、近代的な心の概念で一方的に見たり、一方的に感じたり、一方的に思い出したりという形と

比べると、顔というのは、自分自身だけでは完成できない存在の特徴をなしています。一人で完成することができない存在の特徴をなしているのではないかと思えます。

#7

さて、ここまでは前置きで、今日は「私、顔がないんです」という話をしたいと思えます。これは私が見つけた事例ではないのですが、精神医学者である大平健先生の『顔をなくした女―へわたし』探しの精神病理』という本が、非常に面白いので取り上げました。これは統合失調症にかかっている、二〇年来病歴がある中年の女性の例で、幻覚妄想はあるのですが、患者さんは「これは幻覚だ」と分かりつつ幻覚に陥っている感じで、病的体験に振り回されることも、自傷や他害もない、その意味では安定した患者さんです。

お医者さんの中にはすごく文才がある方が多くて、この大平先生の本も、読んでいるとすごく面白く、とても文学的表現をされる方です。この患者さんは、顔を覆ったまま、ずっと病院に通っていました。

#8

「今、お困りのことは何でしょう」と、これはご本人だと思えますが医師が聞くと、低い声で「実は私、顔がないんです」と言って、顔を覆っていた両手をゆっくり下ろしたのです。のっぺらぼうの、小泉八雲の「むじな」を見ている感じで、怖い感じがしますが、もちろん、顔はありません。

それで、「自分の顔がないと困りますか」と医師が患者さんに聞くと、「そりゃ困ります」。「どういふときに困るのでしょう」「誰と話したりするときですね。何か裸にされているように、心が全部むき出しで……」。「ああ、それで、先ほどは手で顔を覆っていたのですね？」、

患者はうなずきました。「今はどうですか。手で覆っていませんが」「だって、ここは病院ですから、診察してもらうときは裸にならないと……」ということなのです。

見事な言い返しだったのですが、それはともかくとして、これはどういうことかというところ、顔を覆っているというのは、何か裸にされて心がむき出しだというように、この患者さんは捉えていたのです。自分のことが全部見られているというのは、統合失調症の患者さんにある幻想なのかもしれませんが、それが顔に全部出てしまっているのです。

ところが、この患者さんは大平先生に言わせると、顔が全部むき出しになっているといっても、非常に表情が豊かで、子どものように思っていることや感じることを全部、顔に出してしまっているかというところ、その逆です。無表情で、ほとんど変わらないという患者さんだけです。

#9-10

この「顔がない」というのを一体、どのように考えていったらいいのかということ、大平先生はおっしゃっています。「顔がない」とはどういうことかというところ、物理的にfaceがないというのではなく、表情がない、あるいは顔つきがないと解釈します。そうすると自分には表情がないので、心がむき出しになっている。それで恥ずかしいので隠すのだという主張なのです。繰り返しますと、「自分には表情がないので、心がむき出しになっている、恥ずかしいから、隠しています」ということです。

ご家庭の事情があつて、一緒に住んでおられる兄嫁さんと感情的ないさかひがあつて、それがあらわになつていっているのではないかという心配もされていますが、それは置いておいて、顔つきがないので、心がむき出しだと。でもその実、本人は非常に無表情です。この事態をどう解釈するのかということなのです。

#11

これは大平先生の解釈ですが、顔つきもまた、仮面や化粧と同時に顔に付くものである。表情も顔に付くもの。いつもの「自分」を抑え、場面に応じた顔つきをして、役割に沿った「自分」を演じている。もし、「顔がない」患者の問題点が、私が「翻訳」したように「顔つきがない」こととするのなら、彼女は「自分」を隠すことができない上に、「自分」を表現することもできないことになるはずだ。「心が全部むき出し」になって困る一方で、能面のような無表情のままでは、どうもそういうことのようなのだ。

これは少しややこしくて、理解が難しいかもしれませんが。顔つきがないことによって自分がむき出しになるけれども、一方で自分を表現できないというジレンマというか、ダブルバインド状態に陥っているということだそうです。

#12

そこで医師は、患者さんに化粧をするように勧めてみたそうです。私は別に心理学の臨床専門家ではありませんが、熊本のお祭りに出てくる「おてもやん」のように、真っ白に顔を塗って、大阪の「くいだおれ人形」のようなくっきりとした顔で、唇も真っ赤というすぐくはつきりとした表情で、ある意味、分かりやすい化粧をして現れたそうです。それでも、「顔がない」とは言わなくなりました。

前は「顔がなくて困っていたけれども、今度は化粧が顔の代わりになってくれた」ということで、安心しているそうです。そして、「心」がむき出しになることもなくなったと言っています。ここから、化粧というのが表情の代わりになるということ、ある意味で当たり前かもしれませんが、そういうことが分かってきます。

#13

患者さんが主張していること、困っていることというのは、表情がないので、表現ができないと同時に、心がむき出しになるという矛盾した状態になります。そして今申し上げたように、化粧は顔の代わりになるということ。ここからは表情とは一体何かということを考えてみたいと思います。

#14

そこで、表情とは何か、そのときに調べてみました。ダーウインの有名な本の中で、表情というのは生物学的にある程度の安定性があるのではないか。先ほど出てきたエクマンもそれを受けていますし、ある意味で確かに、私も今までにいろいろな人と付き合ってきましたが、表情をあまり見聞違えないので分かるということもあります。表情を、心理学的・生物学的な位置で言うと、顔というのは当然ですが、一方方向に向かう指向性を持った生物だけに有するものです。

頭進性は、目的、注意、意図といった、いわゆる志向的な行動状態の原型をなしています。ですから、哲学などで、「志向性」という概念がよく重要だとされますが、それは実を言うと、生物学的な体の構造に持っているということ。です。

皆さんご存じかもしれませんが、ムカシホヤというのは脊椎動物の一番始まりと言われています。この間、気仙沼で食べましたが、新鮮なものはすごくおいしいです。あそこまでおいしいのは食べたことがないです。東京で出てくるのは、生臭くていまいちだと思っていました。あそこで食べるのはとてもなく、パイアのしょっぱいものという感じ。それはともかくとして、泳いで岩に着装すると神経系が溶けて植物化するという生き物です。

比較解剖学的には、脊椎動物の構造は五億年前に生じたムカシホヤの構造に原型があり、

脊椎動物の最初だということです。ムカシホヤには一応、脊椎動物に備わっている器官が全部そろっています。鰓腸（さいちよう）という呼吸器の成立が「原初の革命」であると言われているそうです。

#15

このような形をしています。

#16

顔というのは、ここでムカシホヤに一種の顔の原型があるわけですが、皮膚呼吸から腸管呼吸へと進化して、それから、呼吸系と栄養摂取系、口と鼻の一体化によって準備されたと言えらると思います。クジラのように鼻が上の方に付いて、口は下の方にちょこんという生き物がいるわけですが、あれは後からできました。

体壁系臓器は当然、随意筋である骨格筋でできているので、動かせません。ところが内臓系は不随意筋で、胃や腸は勝手に動きます。顔の大半というのは内臓筋でできているとされています。

#17

これは有名な本の中から引きましたが、生命の変遷というものをよく観察すると、脊椎動物では体で感じられた快・不快を表現する、つまり原始的な「情動機能」を表す効果器器官が、鰓腸呼吸器官にあることが分かる。原初の脊椎動物においては「感情の座」は内臓と体壁系が一体となった「鰓腸」にある。顔の筋肉を構成している内臓筋は、鰓腸器官に由来しているので、「体壁系呼吸筋」と機能的に連動している。そのため、私たちは体をゆすつて笑つ

たり、体をよじって泣いたりする。人間ばかりではなく、犬もそうなのだということです。このように内臓頭蓋、つまり顔というのは「精神神経活動」を表す効果器官として、その個体の「ありよう」をみずから示す。摂食器官と呼吸器官が全部くっ付いていて、かつ、内臓筋と随意筋が同時にくっ付いているので、全人格的と動物に当てはめるのがおかしいかもしれませんが、全存在的な表出の場所になっているということです。

#18

当たり前ですが、鼻や目、口などはそもそも異なった機能を持っています。従って、呼吸器官は横に付いていたりします。顔は呼吸と栄養摂取という生命に直結する内臓器官の統合された末端であって、生物全体の「ありよう」を示しています。これらが統合的に働くとき、怒り、悲しみ、喜びといった表情がつけられるとされています。

ただ、これが社会的な文脈で、喜びというのが単純なものではありません。申し訳ないのですが、お葬式に行つて遺族の方を観察してしまうと、興奮していたり、怒っていたり、あるいは完全に放心していたり、泣いていたります。

怒っている人もいて「なぜこいつは怒っているのか」と思わないで、「悲しくて興奮して、いらいらしているのだろう」と理解します。普通は、あれも悲しみの表現というふうに思います。従って、悲しみというのは多分、一つの動作で表されるものではないのでしょうか。むしろ、てきぱき動いている人というのは、相当つらいのだろう、そうしていないといられないのだろうと私たちは普通、解釈します。

従って、悲しみも、わあわあ泣くというだけの単一の行動に結び付いているわけではないのは分かります。リゲット（フィリピンのイロンゴット族の狩りの前の興奮、怒り）のような、狩りのときに使う気持ちでしょうか。気合が入ったような感じと、相手を倒すというよ

うな複合的な感情の部類だろうと思います。

#19

さて、一方でダーウィンや先ほど言ったエクマンは「表情の普遍性」ということを言っています。表情には先ほど言った、文化的に変化するものと、文脈によつてすぐ変わってくるものが当然あるわけです。例えば古代ローマには *fastidium* という感情があつたそうです。*fastidium* というのは嫌悪感なのですが、階級が上の者が下の者に対して示す「無礼な！」という感じの嫌悪感です。これはそういう社会になつていないと、その感情を示しても嫌悪感とは取られずに、何か別の感情として取られてしまいます。社会が違つたと、ある感情というのは、理解し難くなるのです。

そろそろ年末で忠臣蔵の季節ですが、どうでしょう。あれを見て、あの感情を理解できませんか。あそこまで報復しようとは思わないし、ああいう思慕の情を自分の上司に対して皆さんが感じているかというところ、決して感じていないと推察します。従つて、あれは独特な社会体制の中で初めて生じる感情です。もちろん、仇を討たないと武士の名折れだとか、逆に社会的に批判されるなど、いろいろなものが結び付いていると思いますが、ああいう復讐の感情というのは現代社会ではなかなか理解できないものです。「何でこんな無駄なことをしたのかね」と皆さん、おっしゃっているのではないのでしょうか。ですから、歌舞伎などで前振りがなく分からないと、その感情は分かりません。

#20

従つて、表情には普遍的・自然的コードとして起動していくものがあります。社会や文化はそのコードという部分を操作する第二階のものがあるのではないか。私はこの本ではこう

書きましたが、ちょっと最近、そうではないかと思ったりします。一応、立場を通しますと、現在の私の表情が、恐怖を表しているからこそ、それを抑制しようとするし、怒りを持っているからこそ、それをまた別の形で表現しようとはします。自分の表情がそもそも何を表しているか特定できないようなら、表情を抑制する必要はないのです。

#21

顔のない女性というのは、この普遍コードとしての表情をうまく表出できないでいる。従って、表現できずに無表情でいるわけです。薬のせいなのかもしれません。そこまでは分かりません。

それがなぜ、「内面がむき出し」になっていると感じるか。内面がむき出しになっているから、気持ち直ぐに直接表れている感じがするとは、どういうことになっているかというところ、表情というコードがあるから、それが多分、相手にも分かるのです。そういうコードのようなものがあるなら、コードというのは、「脱コード化」などのコードですが、それとは異なるものやそれを隠したものであるとしての内面が可能となるのではないか。

つまり、宇宙人が来て全く別の顔をしているとして、スター・ウォーズのチューバックスグーのサルトンばいならまだいいのですが、訳の分からない宇宙人が来て、どういう表情なのか、一応顔つばいものはあるけれども、何をしているか分からないとすると、それが変化しても、それは一体、何か直接の表情なのか、それともそれを操作した第二階の操作なのかというのは、当然、分からないわけです。私たちの表情というのは、何となく似ているから、それをコントロールすることができているわけです。

22

私たちが「内面性」や「内側」と呼んでいる心の働きというものは、表出されたものとは異なった行動、あるいは「相手に話している内容と別のことを話す」。つまり、内面では彼は別のことを言っているとか、彼の内面にしたときは、表に出ていることと別のことを言うわけです。笑っているときに、本当に喜んでいるのは内面ではなくて、それは出たとおり。本音や建て前は、本当は原則と個別という意味で、今使っている意味ではありませんが、本音と建て前というのも、建て前としては彼は怒っているけれども、実を言うと、本音としては喜んでいるというようなことを私たちは言います。ということは、先ほど言った「内側」や「内面」というのは、実を言うと表現するコードがあるから、それが可能となっております。幼児や動物は、この意味での内面がないのは、自分のコードを操作できない。あるいは、操作可能性に気付いていないからです。でも、動物でも本当は哺乳類、犬などは実を言うと、結構、高度化して操作しているのではないかと思うときもあります。怒られたらシヨボンとしたふりをします。かなり知的なのではないかと思うので、この辺はちよつと眉唾をご覧ください。ただ、単純な動物はそこまでいかないと思います。

23

従って、表情は間主観的であり、相手に効果をもたらします。そもそも外に向いているわけです。だから内面とは、この効果を意図的に利用することから生じます。私たちが「心」と呼んでいるものは、表情があるから生じたのではないか。普遍的な自然コードとしての表情があるからこそ、他者との関係を操作できる。そして、その操作こそが「内面」や「心」というものの誕生なのではないでしょうか。

#24

ここは省略して、次の方にもうお譲りしたいと思いますが、化粧というのはそうしたコード化を意味しているのではないか。化粧というのは憑依であると言いますが、今、男性であれ女性であれ、われわれも眉毛を整えます。私、ご覧のとおり男性ですが、これはそのままかという、ひげをそって、一応、眉毛がほとんど一本になってしまっているので、真ん中で切つて、多少はいじつてあります。塗つてはいませんが、ひげ剃り後もまたいろいろ塗つて、はっきりとは出ていないかもしれませんが、それなりに化粧をしているのかもしれない。そして、健康そうに見せています。これも、まあ化粧の一種です。

化粧自体がコードとして働いて、今、女性などが化粧で使っているコードというのは、やはり何種類かしかありません。仕事用、プライベートで楽しむ用、パーティー用などの5、6種類のコードしかない気がします。どうでしょうか。妻から聞きました。

#29-30

本当はもつと昔はあつて、動物のコードや憑依のコード、幽霊のコードなどがありました。それが現代社会ではそういうものは使わなくなり、何種類かになったと思つています。私の発表は以上です。

(床邑) 河野先生、どうもありがとうございます。そもそも顔とは何かということに関わる哲学のお立場からの問題提起であつたかと思つています。

それでは、プログラムで前半の最後のご発表者ということになりますが、高橋康介先生、大石先生、島田先生の三人のグループによる「顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」という、先ほども申し上げましたが、高橋先生たちは人類学的なアプローチと、心理学・

Ⅲ 報告

認知科学的なアプローチの接合的と言いますか、学際的なユニークなご研究をされていらっしゃいます。今日もそれに絡んだご報告と承知しております。

それでは、準備はよろしいでしょうか。それでは、よろしく申し上げます。

「顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」

高橋 康介（中京大学）

大石 高典（東京外国語大学）

島田 将喜（帝京科学大学）

（高橋）ご紹介ありがとうございます。中京大学の高橋と申します。私たちは変則的に、三名の登壇者が入れ替わり話したいと思っています。

一応、心理学的と言われたのですが、ここに書いてあるように最近、認知心理学者の私と人類学の大石さん、霊長類学の島田さんと一緒に、いろいろなフィールドで実際、実験して実証データを集めていこうという試みをしています。もう、ここ数年ぐらいやっていて、これからこれをどんどん広げていきたいのです。今まで取ってきたデータを詳しく心理学的に解説してもいいのですが、それをやるよりも、われわれの活動がどういうものなのか紹介した方が、多分、この先のためにも実りがあるだろうと思います。

ですから、心理学的な紹介は少しにして、あとは島田さん、大石さんから、実際にその場で実験するということがどういふことなのか、そこで何に気付くのかということをご紹介していただこうと思っています。最初に一〇分ぐらい、私が触りを話します。

#2

特に私たちが対象としているのは、リモートカルチャーですね。これは、われわれの研究ではありませんが、今年の夏に「ネイチャー」に発表された「南米ポリビアで不協和音が不協和と聞こえない」という衝撃的な結果が発表されています。

こういうリモートカルチャーを見るということは、われわれが「そんなわけはないだろう」と今まで常識的に考えて、「そんなことはあり得ないだろう」と思ってきたことが、まさにひっくり返される可能性があります。

#3

多くの文化心理学的視点というのは、ここにある『木を見る西洋人 森を見る東洋人』や、Infographicで東洋と西洋のいろいろな違い、思考の違いや知覚の違いというものをそれに浮き彫りにしてきました。もちろん、これはすごく価値があることで、これまで文化差がいろいろな認知過程に及んでいるということが分かっています。

#4

入力があれば、東洋人はこう見えて、西洋人はこう見えて、その結果、出力が思考なり、言語なり、知覚、認知が異なるということが分かってきました。この異文化比較ということが多く行われてきたわけです。

#5

われわれはそのリモートカルチャーで何がしたいかというところ、多文化でそこに何が存在しているのかということを知りたいというのがあります。文化というのはもちろん西洋と東洋だけではないし、グローバルに見れば西洋と東洋というのは、東洋といっても、特に異文化心理学の場合は、東アジアの一部地域だけなのですが、めちゃくちゃ似ているわけです。両方近代化されているし、建物の構造も大して違わないし、都市の景観も大して違いません。

世界には、この後、島田さん、大石さんが紹介してくれと思います。全然違う環境が

いくらでもあるわけです。そこに出て、その人たちが何を考えて、どのようなものを見方しているのかということを実証的に調べていきたいというのがモチベーションとしてあります。

#6

ですから、全体のスキーマとしては、こういうもので、東洋対西洋という異文化比較から、リモートカルチャーを含む多文化比較という視点を持ちたい。

もう一つ、東洋はこう、西洋はこうということではなくて、それを生み出すような環境・文化・地域要因を知りたい。これを知るのには、私は心理学者なのですが、多分、心理学的視点だけでは無理で、文化人類学者や霊長類学者など、本当にフィールドに出ているいろいろなところを生目で見えてきた人が、なぜこういう認知的な差異が生まれるのかということを解釈するというプロセスが必ず必要になってくると思っています。

山口先生が提案されている新学術自体が、それをやろうとしていることなのですが、われわれがこの数年やってきたことで、これからやろうとしていることは、それをすごくギュッとコンパクトにまとめた形になっていると思います。

最近、面白いと思っているのは、トランスカルチャーの研究をこれからしていくわけですが、この三人、高橋・島田・大石の間で、一向にいつまでたってもトランスカルチャーな議論が続いていて、もの見方はこの三者の間で全然違います。この発表だけでどれぐらいその見方が違うかということをお分かっていただけたらと思います。なかなか分かり合えないというわけではないのです。ゴールはあって、そこに向かっていくのはいいのですが、そこに至る過程を共有すると、いかにもの見方が違うか、気付きが違うかということがよく分かってきます。

私は、心理学的視点からデータを取るということをするわけです。それはモチベーションとしては、文化人類学的視点から生の目で見た観察や気付きがあつて、これまでの文化人類学は、この観察と気付きを文化人類学的解釈で紹介していたわけです。ですが、ここに一回、実証的データを入れるということで、そこからまたここに戻つてくると、新しい観察・気付きが多分生まれつつあるというか、これは島田さん、大石さんの中にはきつと生まれているだろうと、私としては期待というか、希望しています。こういう循環をつくっていききたいので、多分、われわれは何となくつくれているのが現状かと思つています。

#7

少しだけ経緯を説明すると、二〇一〇年ぐらい、もう五〜六年前ですが、もともと私と島田さんが友達だったというか、島田さんは先輩だったのですが「何か一緒にやってみよう」ということで、私は認知心理学をやつていて、島田さんはそのころ、タンザニアのマハレに入つていたので、そこで何か実験的なことをして、実証的なデータを集められないかという試みを始めました。

最初のうちは調査許可の問題や、一体どんな実験ができるのかすら分からない。そもそも、フィールドワーカーから実験というものがどういうふうになり立つのか分からないし、私の方からすると、実験する上で常識的なことが、全く通じないということがだんだん分かつてきました。

最初、例えば紙とえんぴつで調査しようと思つたら、データを取れなくなりまして、最近ではタブレットを使ってやってみると、後で画像を紹介されると思いますが、結構、データは取れるということが分かつてきました。タブレットというのは、グローバルに、ユニバーサルに使いやすいデバイスなのです。割とデータが取れます。今、学会発表や論文投稿などを

していて、これから新しい仲間が東南アジアなどで増えて、世界中に出ていこうというのが現状です。

#8

少しだけこれまでやった実験・研究について紹介しておきますが、これは日本と、カメルーンのピグミーたちが住んでいるところと、タンザニア・マハレのトングウェたちのところでデータを取っています。これは多分、すごくうまく取れている状況なのかもしれません。雰囲気としてはこんな感じで、タブレットを実際に持ってきて、それを自分自身で操作してもらいます。つまり、これは希望的観測ですが、再現可能な実験ができているという状況です。少なくとも、刺激反応に関しては再現可能な状況でやっています。要するにインタビュアーを挟むのではなくて、デバイスをポンと渡して、自分自身でやってもらうということです。その手続き自体は完全に再現可能です。

#9

まず一つやったのは、これは今、投稿中なのですが、表情認知の実験をしました。ただ、表情認知といっても、よくある自文化・多文化の話をして、アジア、アフリカ、コーカシアンの三種類に加えて、最近どんどん出ている絵文字というものに少し興味があったので、この絵文字を入れてみました。

これはウエスタンのニコニコや、ムスツとしているものや、日本のニコニコや泣いているもの、スマイリーのHappy、Sadです。これを日本人とタンザニア、カメルーンで皆さんが表情をどう評価するのか。このエージェント自体がどう感じているのかを推測してもらうという、要はHappyに見えるかSadに見えるかということ、答えてもらうという実験です。

#10

結果をお見せしますが、リアルフェイスに関しては、文化差はほとんどありません。ほとんどないと言っても、ごくわずかにあります。逆に言えば、ごくわずかにあると言っても、ほとんどありません。つまり、アフリカ人の刺激に関してはみんな一緒で、西洋人に関してもみんな一緒で、東洋人の刺激、アジア人の顔の表情に関しては、日本人はもちろんできるのだけれども、カメルーン、タンザニアの人たちは、少しSadの表情が分かりづらいという差です。

多分、この差がこれまでのリアルフェイスに関して自文化・異文化・多文化で、要するにイングループ・アウトグループ効果と言ってきたものだろうと思います。

それに対して、絵文字のようなものを出してみると、全く違うことが起こります。このあたりにいる人は、誰から見てもこれはニコツとしていません。誰から見てもニコツとしていたと思うようなスマイリーが、日本の被験者だと、みんな、これがニコツとしていればHappyと、ムスツとしていればSadと答えるのです。ですが、カメルーンやタンザニアでは、多少傾いているのですが、ほぼフラットになっていて、つまりこのスマイリーの三種類のアイコンに、表情が恐らく読み取られていないということが分かりました。

これは結構、びっくりしたわけです。こういうものは空港などどこでも使われているし、シンボルとしても使われているわけです。もしかしたら、最近思っているのは、このようなものは、われわれにとっては表情を感じを持ったエージェントとして捉えられているけれども、ある別の文化の人にとっては、まさにここに言葉で「笑い」と書いてあるような、本当にシンボルとして受け止められている可能性があります。だから、これが指し示すところは「笑い」と、もしかしたら分かるかもしれませんが、このマーク自身に何か表情的なものが備わっているという捉え方はしていない可能性があるということが分かっています。

#11

要はどこまでこのエージェンシーを感じるかのようなもので、同じようなこういう幽霊のようなパターンにどれぐらい顔を見るかというパレイドリア研究などもやっています。そうすると、顔っぽく見えるノイズパターンに対して「顔だ」と認識する確率は日本に比べてタンザニアやカメルーンの方が低いです。これが何を意味するのかは、まだまだ全然分からなくて、こういうデータが出てきて、それを基に次に何をやったらいいのかということを文化人類学的視点、フィールドワーカー的視点に戻していくのが多分、重要なプロセスだと考えています。

#12

私の担当はここまでで、私自身、認知心理学者から見ても、フィールドに実験を持ち込むことの意義というのは、端的に言って、自分は今まで日本のある片隅の研究室でひたすら被験者相手にやっていたのですが、そういうことは全く違う考え方、世界の見方があるのだというところが気付ける、それはすごく面白いです。それはしかも、データを通して理解できるわけです。これは認知心理学者としての特性ですが、データを通して、まさかあのスマイリーが笑っていると思われなかつたわけで、そういう全く別の見方があるというところが分かりました。

あと、まさに先ほど説明したループで、これはゆるゆるな異分野融合とは違って、まさにそのプロセスを共有して、しかもそれは助け合いというより、「違うだろう」と言い合える部分が結構多くて、「それはそうじゃないんだ」と、本当の異分野融合のようなものがだんだんできてきている気がしています。まだ成熟してはいないと思いますが、だんだん育ってきているような気がします。

あとは個人的には、フロンティア精神のようなものを感じられるということです。こういった楽しさ、意義を感じています。ここで次に島田さんにバトンタッチします。

(島田) バトンタッチさせていただきました、帝京科学大学の島田と申します。

#14

私は普段、この研究に関して言うと、タンザニアのマハレで野生のチンパンジーを追いかけて回して、その行動に関しての研究を続けています。普段、こういう仲間たち、アシスタントたちと一緒に生活をしていて、彼らを雇い上げて、彼らの悩みを聞いたりしながら、いわば社長業のようなことを兼業しながら、フィールドワークも進めるといっていいことをしています。よく見ると、顔に関して言いますと、顔は黒いのですが、正面を向いていない人など聞いて、何かこういうところも日本人と少し違うなとたまに気が付いたりするわけです。

生活していると、彼らは私たちが彼らのことを理解しているよりも、はるかに日本人のことを理解しています。はつきり言って、トングウェたちはオリジナルな表情を見せることはないのですが、こうした完全な田舎に行ってしまうと、少し様相が変わってきます。

#映像

これは朝の風景ですが、子どもたちが朝、家の集まるところにやって来て、「おはようございます」。ここに一番偉い人が、ただ、ポーツと立っているのです。

今、気が付いた方もいらつしゃると思います。子供が二人続けて、立っているおじさんに対して、距離を取ってかしわ手を打つのです。しかも、膝をかがめてかしわ手を打つのです。トングウェたちは、このように「かしわ手をあいさつで使う人たち」ということで、文

化人類学的には知られています。ただ、このあいさつをちゃんとするようなどころに行くには、私はいつも四〇キロメートルぐらいの距離があると一日歩かなければ、たどり着けません。そういうところに行かないと、見つけれないのです。まだまだ非常に昔ながらのトングウエの文化が残っていると、こういうところに行くとき、いかに自分がまだトングウエのことがちゃんと分かっていたのだったということに気付かされます。

#16

表情の話ということで、少しずつ紹介したいと思いますが、身体表現、こういう絵などがあります。最近、テレビが普及して、先ほど絵文字の話がありました。「これは何だ」と、日本人からすると気持ちが悪い絵なのですが、最近、糸人間、針金人間のようなものが出てきたりしています。

それ以前は、こういう壁などによく分からない絵を描いてみたり、後で紹介しますが、ある特定の場面で、このように人が逆さまになって、人が手を挙げている絵が描かれています。こういう場面以外では、彼らがそういう絵画を描いている姿を私は見たことがないのです。外向けに表現する、芸術的な表現をするということに関して言うと、あまり見たことがないという人たちです。

#17

もう一つ彼らの文化を理解する上で大事なのが、彼らの生活環境です。私ごとこと歩いて奥地まで行くのだと言いましたが、こういう道をひたすらどんどん歩いていきますが、よく見ると森がすかすかです。疎開林といいますが、二〇メートルぐらいの木がまばらに生えていて、ライオンなどがたくさんいて危険なのですが、そういう所をとことこと歩いてトング

ウエたちの村まで行きます。彼らはこういう原野の中で暮らしているという状況です。

#18

さて、私たちはトンゲウエと長く暮らしていて、正直、だいたうトンゲウエのことは分かっているかと自負しているところもあります。先ほど高橋さんが「文化人類学者は文化人類学の理論でもって解釈を進める」と言ったのですが、私自身は少し文化人類学者とは立場が違います、同じようにトンゲウエたちを理解して、彼らと生活をしていかなければならない者として、ある程度理解していると思っていました。ところが、いろいろな場面で、「やっぱり俺、こいつらとは分かり合っていない」と思うことがいっぱいあるのです。そういう瞬間がたくさん訪れます。

例えば、彼らは僕から言われないと「ありがとう」とは言いません。これは非常に日本人にとってはストレスなのです。これは慣れますが、お礼を言わないのは、最初はストレスです。

それから、これも私が普段暮らしている、日本人慣れしたトンゲウエたちはほとんどありませんが、先ほどのあいさつを受けていた、村で一番偉い人はマネンゲという名前なのです。訪ねていくと、私は「おー、マネンゲ、久しぶり」というように言うのですが、一二年ぶりぐらい久しぶりに会うにもかかわらず、突然「機械をくれ」「お金をくれ」と言ってくるのです。私は「ガンー」となって、「何でそんなこと言われなあかんのや」と思うのです。

あるいは二三年たつて会いに行つて、やはり同じようにマネンゲさんのお嫁さんが、「昔、来ていた日本人から言つてを預かつているはずだ。それをくれないのか。彼は私に手紙をくれると約束した」とか、「おまえは俺にサッカーシューズをくれると言つた。なんで今日、持つてきてくれないんだ」と要求してくるのです。約束というか、時間の概念がだい

ぶ違っているのではないか。つまり、二年前に別れて、それっきり二年間のブランクがあったにもかかわらず、その二年間がなかったように会話を進行させてしまうというところが、僕にはよく分かりません。その分からなさが、分かっていたつもりになっていた自分が、「何を分かっていたのだ」ということにすごく疑問を感じるのです。

#映像

#20

最近では私が普段暮らしているところの近くでは、こういうものを見かけないのですが、太鼓をたたいて歌を歌って、何かお祭りをしているのだらうと僕は思ったのです。楽しそうだから、交せてくれと言いました。狭い部屋なのですが、何かつぼをこちら側の壁に座っている人に触らせるといふことを、この赤い人たちがする。少しずつ指で触って、色を付けていくという作業をしています。

私も太鼓をたたくのが好きなので、彼らに教えてもらって多少たたくのですが、今のこのリズムのことは、Bijegeという現地名が付いています。「Bijegeの太鼓だ」と思って、何か楽しそうなことが行われているに違いないと思っていたら、「いいよ」と言われて中に入れてくれました。「ビデオも回していいか」と聞くと「いいよ」と言うので撮っていたら、ああいう感じで、何かすごくきれいな歌を歌っているわけです。ずっとこれが続いていくのですが、一体、何をしているのか全然分かりませんでした。だんだん、これは治療儀礼と呼ばれているもの一種だと僕に分かってきます。

それで、その行為をよくよく観察していると、先ほどの赤い人がヤンキーの兄ちゃんのような格好をしています。医者（呪医）なのです。その隣に実は赤ん坊を抱えたおばさんがいるのですが、その人も医者（呪医）なのだと分かります。では、治療される人は一体どこ

にいるのか、よく見ていないと分かりません。

#21

実はそういう進行があつて、日本に帰つてきてから、よくよく文献を調べてみました。すると、象撃ちの名人と言われる人がいるのですが、象というのは、たたりの力が強くて、象を殺した象撃ち名人の子どもは、お父さんが殺したことのを避けるために、こうした治療儀礼をしなければいけないという伝統にのつとつてやっている儀礼だったのだということに、後になって気付きます。

彼らにとつてはこの儀礼というのが全然普通のことと、生活の一部に入っているわけです。呪いというのも、ものすごく身近なものとしてあつて、はっきり言えば先ほどのマネンゲさんの家や、非常に田舎のトンゲウエたちというのは、「自分たちは精霊と一緒に暮らししているのだ」ということを平気で口にします。「精霊つて何？」と私などは思うのですが、それが当然と思つている人たちと、日本から来た私たちというのは、だいぶいろいろなところに違いがあつて当たり前で、何か「表面的に分かり合えた気持ちになるのはよそう」というのが、私の長いフィールドワークの経験で思つてきたことです。

#22

そこで、高橋君のように平たく言えば、客観的な手法を持ち込み、それによつて、彼らの認知的な特性について、先ほどのエモティコンの解釈が日本人とは少し違うということが、少しずつ分かつていくと、それを基にして、私が彼らに感じる違和感というものをもう少し、「なぜ違つているのだろう」ということに、ある意味の解釈を与えられるのかということ、私は一生懸命やっています。

いろいろ言いたいことはありますが、次にバトンタッチします。

(大石) 皆さん、こんにちは。東京外国語大学国際社会学部でアフリカ地域研究のコースを担当しております大石と申します。あと残り時間が四分位なのですが、ささっと行きたいと思います。

私はもともと、島田将喜さんのアニマシーの多文化比較などをしようという科研に誘っていただいて、それに非常に興味を持って参加させていただいたのがこの共同研究への合流の経緯になります。

#24

僕のフィールドはカメルーン東南部の熱帯林で、先ほどお話のあった島田さんが通われている疎林のような環境と違って、もっと湿潤で、植生がワシヤワシヤとなっている所です。そういうわさわさした植生を地域の人々がどう認識しているのかについての調査もしたのですが、熱帯林の中は見通しが悪くて一〇メートル、二〇メートル離れた森の中では、人の姿も見えないことが多いというぐらいに密度の濃い植生のところでした。私の調査地では狩猟採集民のピグミーと農耕民のバクウエレという人たちが住んでいます。二つの民族は愛憎相半ばといった複雑な感情を相互に抱えています。したがって、顔や表情をどう認知するのかという問題は民族間のコミュニケーションの問題として切実な意味を持ち得ます。例えば、ピグミーの人たちは隣に住んでいる民族集団——バクウエレのことですが——をゴリラに例えたりします。なぜかというところ、ピグミーの人たちによればその両者は身振りや姿勢、顔が「酷似しているから」ということがあります。

バカ・ピグミーはバクウエレ をゴリラに譬える



エボボ (バカ語)

ジル (バクウエレ語)

- ・ 森の中で出会った時の反応 (「ドラミング」) が派手、人に向かってくる
- ・ 特にシルバーバックの、背筋を伸ばして反り返った姿勢が、バカに対して威張るときの農耕民にそっくり

#24

#25

彼らは彼らなりの理論をつくっていて、一つは農耕民が生まれ変わるとゴリラになるという考え方をします。あるいは、農耕民というのはみんな妖術使いであって、それで好きなときにゴリラになって、自分たちを森の中で待ち伏せして襲ったりする、といった考え方を持っています。

#26

そういうイメージをイデオムとして口先だけで言っているのかと思つたら、そうでもないらしい。子どもに絵を描いてもらうと、例えば「ゴリラ人間」という感じで農耕民の表象というものが出てきます。それで僕は結構びっくりしたのですが、このように動物がリアルな人間の顔を付けて描かれるのですがそれは一体どういうことなのか。彼らは、いくら木が密に生えているといつても森の中で動物などとそれなりに対面する時間を持っていて、集落でも自民族はもちろん他民族の人たちと対面交渉をしています。

この事例は、単に認知とは異なるレベルの表象の問題だと言つて片づけてしまうこともできるでしょうけれども、私はむしろ彼らがどのように顔を見ているのか、つまり顔の認知の仕方というものがいかなものなのかに関心を持ちました。動物のような非人間を認知することということ、人間を認知することに一体どんな違いがあるのか、あるいはそれはわれわれの社会や文化と同じなのかということに興味がありました。それが、高橋さんの顔や表情認知の比較実験の話に乗った大きな動機です。

#28

話を少し戻しますと、バカ・ピグミーやバクウエレによると野生のゴリラの中にゴリラ人

#26



バカ・ピグミーの少年による「ゴリラ」のイラスト (10歳)

間や人間ゴリラというものがいるのですが、人間の生まれ変わりのゴリラは優しい顔をしているとか穏やかな表情だと言う一方で、人間が妖術によって変態したゴリラは「凶暴」だと言うわけです。森の中でパッと見ると生物学的に同じゴリラなのですが、それはどのように彼らの目に写っているのかということに興味を持ったわけです。

またこれは今年九月にフィールドに行つて聞いた話ですが、歩いていた農耕民が木立に隠れて一瞬ゴリラになって、また人間に戻つたといったことが、日常会話の中で普通に出てきます。それを聞いて、みんな驚くわけでもありません。

あるいは、これはカメルーンの隣で今、内戦をしている中央アフリカの民族誌で紹介されている語りですが——今ちょうど学部二年生と一緒に読んでいるところですが——若い娘に一カ月以上夜這いに通つたチンパンジーの話があつて、それは夜になるとチンパンジーが娘の小屋をノックして戸を開けてもらつて、朝方まで一緒に寝てまだ暗いうちに帰っていくというのです。あるとき、娘の親が「何や様子がおかしい」と思つて開けたら、チンパンジーが娘のベッドから飛び出して森に帰つて行つたというような話があるわけです。そんなわけで、どうして娘はその「チンパンジー」の寝顔が見られなかつたのだろうかなど僕は思うわけです。

#29

それともう一つ、フィールドワークをする中で個人としての顔の認知と集団としての顔の認知はどういう関係性にあるのかということに関心があります。それはなぜかというところ、私自身が研究者であるとか日本人であるとか、ピグミーの言葉で “bunge”、つまり「よそ者」なのですから、どのようにそういう私の顔や表情が彼らに認知されているのだろうか。僕がジェスチャーや言語以外の表現で彼らと分かり合えていると思つてきた部分が——無前

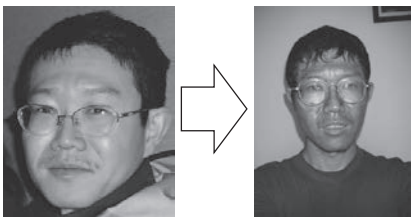
#28

人の顔、非人間の顔：
「動物」には顔があるのか

- ・ゴリラ人間や人間ゴリラの表情：生まれ変わりゴリラは「穏やか」「優しい」に対して、妖術で変態したゴリラは「凶暴」
- ・歩いていた農耕民が木立に隠れた…一瞬ゴリラになり…また人間の姿に戻つた(あるバカ男性の語り 2016.9.)
- ・若い娘に夜這いに来るチンパンジー：アカ・ピグミー女性によるチンパンジーとの結婚の語り (Hewlett 2012, Chap. 3) ---寝顔

#29

“chercheur” / japonais/ bungé



前

後

提にある部分の感情表現の交流ができているといふ思い込みが私にはあつたと思いますが――高橋さんの実験というのは、それを揺さぶり打ち壊す効果を持ちました。

30

そういえば、ということとで考えてみれば顔とアイデンティフィケーションにまつわる素朴な疑問というのはフィールドワークの過程の中にたくさんあります。例えば個体識別されるかどうかと表情や感情が伝わるかというのは、まったく別の話ではありますが、私はもう一四年間も同じ村に通っているのにいまだに毎回同僚研究者の「ハヤシさん」と間違えられるのです。そして林さんは「オオイシ」と呼ばれるらしいのです。他に九人ぐらい同じ調査地に頻度こそ違え通ってきた日本人研究者がいるのですが、大体その顔を間違えられる人間の組み合わせが決まっているのです。林さんは僕に間違えられるとすごくいらつくらしいのですが、なぜ他の研究者の「キムラ」「キタニシ」「サトウ」と呼ばれないのかということには不思議です。先ほど、渡邊先生の話で触れられていた Other-Race Effect や Self-Race Effect というのがあって、まさにそういう現象とも関わってくるのではないかと思うのですが、それがすごく気になっていました。林さんと僕の顔はかなり違うし、体格も違うのに、なぜそのようにアイデンティファイされるのかということなのです。

31

ほかにも面白いことはいろいろあるのですが、タブレットを調査地の日常に持ち込んで、直接、私のテーマである人々の生業や食を扱う生態人類学という分野とまったく関係のないポケモンのような映像を見せる。それで妙な遊びのような空間が生まれる。そういうものをフィールドに持ち込むことの意味を人類学的にどう考えたらよいか。この写真は実験がう



31

個の顔、集団の顔:

フィールドワーカーは個体識別されているのか

- ドンゴ村での調査開始から14年
- 佐藤弘明博士(浜松医大)以来、日本人研究者としては10人以上が入ってきた
- 大石は、毎回「ハヤシ」と呼ばれることがある
- 林耕次さん(地球研)は、「オオイシ」と呼ばれることが多いらしい(本人曰く、何度も言われると「イラつく」)
- 「キムラ」とか「キタニシ」とか「サトウ」と呼ばれないのはなぜか?

30

まくいっていない場合です。ピグミーさんはなにやら面白そうなのがあると、一人でタブレット実験をやってもワラワラワラとどこからともなく現れて被験者を取り囲んでしまつて、このセッションの実験はボツということになったという状況です。実験自体は、また十分に時間を置いてやり直しました。

#32

そういうわけで、私は高橋さんとの共同実験での私的な関心としては、熱帯雨林に棲む人々たちによつて顔がどう認識されるものなのかということ、例えばタンザニアの疎林環境、乾いた、見通しの利く視覚環境の人たちと比較してみたいのです。というのも、熱帯雨林のコミュニケーションというのは、まず見えないというのが大きくて、儀礼やお祭りにおいても音環境が重要だということがこれまでも指摘されてきました。

今日の顔認識をめぐる議論はずつと視覚の話が中心でしたが、そういう音声比較優位な環境における実験をすることによつて、顔認識における視覚中心主義を相対化することにつながるのではないかと期待しています。そして、そのうえで「見えない顔」ということが立ち上がってくるでしょう。人類学にはその辺にまで話を持っていきたいと思っています。

#33

もう一つ興味深いのはこの共同研究のプロセス自体が異文化接触の社会実験になっているということ。バカ・ピグミーやバクウエレという人たちが、興味津々にタブレット装置や実験コンテンツと戯れるさまというのは見えて非常に面白いです。ただ、タブレットを持ってデータを集める係というのではなく、高橋さんの実験室や島田さんの類人猿調査地

#32

認知科学実験への私的関心①

- 顔とはどのように認識されるものなのか？
 - 認知環境として対照的なサバンナと熱帯雨林（見える／見えない） <= 「種」を越えた制約
 - 熱帯雨林のコミュニケーション：音環境が重要（木村2003『共在感覚』；佐々木2010「音声の優越する世界」）
- ↓
- 音声比較優位な環境における認知実験
 - 顔認識における視覚中心主義の相対化
 - 光、音、触覚、...かならずしも見えない「顔」

#33

認知科学実験への私的関心②

- 異文化接触の社会実験として
- バカ・ピグミーやバクウエレと、タブレット装置や実験コンテンツ（顔文字、アニメ）
- 高橋さん（認知科学者）や島田さん（霊長類学者）とのフィールド相互訪問
- 実験とフィールドワークの引っ張り合いが起こるのではないかと（！？）

とのフィールド相互訪問を進めていきたいと思っております。

#34

その中で、実験者・被実験者という認知実験の垣根を壊してみたい。高橋さんはまるで神のごとく実験結果を分析しているのですが、そういう人をフィールドワークに連れていくことによって、フィールド調査の醍醐味でもある現地に関わる葛藤を味わっていただきたい。研究の場を共にすることで、そのようなフィールドと実験の引っ張り合いが観察できるのではないかと思っております。今後の展開にわくわくしています。二分ほどオーバーしましたが、これで終わります。

(床呂) はい。大石さん、ありがとうございました。実験なり、研究の内容、結果の内容自体も興味深いのですが、そのプロセスというか、どのように方法論を異なる分野同士で築き上げていくかという点でも大変示唆的な、刺激的なご報告をありがとうございました。

それで、ここまでさまざまな認知科学、心理学、哲学、人類学といった、いずれも刺激のかつ中身の濃いお話があつて、いったんここで若干ブレイクを入れさせていただければと思います。若干押し気味ではありますが、一応予定どおり一五分休憩とさせていただきます、四時一五分までにこの会場にお戻りいただければと思います。

—— 休憩 ——

(床呂) それでは、本日のシンポジウムの後半を再開させていただきますと思います。

すみません、一件、アナウンスですが、昨年度に開催した同じ顔に関するシンポジウムの

冊子のご希望が、先ほど何人かの方からあったのですが、ストックを何部か持つてまいりましたので、後ろの入り口の近くに置いてあります。そこに参加者リストがありますので、大変お手数ですが、持っていかれた方は印をご自分のお名前の横に、先ほど冊子という欄を書きましたので、何か印を付けていただければと思います。お手数ですが、ご協力よろしくお願ひします。

それでは、今から後半に入っていきたいと思ひます。今まで人類学や哲学、あるいは心理学、認知科学、そして異分野間の学際的な研究のお話がありましたけれども、後半はどちらかというところドックスな文化人類学的なアプローチによる、広い意味では顔や身体の隠蔽、隠すことに関わるテーマの報告が二つ続くこととなります。

後半の一人目は鳥根県立大学の塩谷ももさんから、インドネシアのイスラーム教徒の女性のヴェール着用に関するご報告ということになるかと思ひます。

塩谷さん、ご準備はよろしいですか。それでは塩谷さん、よろしくお願ひします。

「多様なムスリム・ヴェールが伝えるもの
—インドネシアの事例から—」

塩谷 もも（島根県立大学）

ありがとうございます。島根県立大学の塩谷と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今日はヴェールを中心にしてお話をしていきたいと思ひます。

#2

はじめに、私が対象にしているのは、まずインドネシアのヴェールなのですが、インドネシアの中でもこれまでジャワ島で調査をしてきました。インドネシアのヴェールがどういふものであるかというのを、まず写真で少しご覧いただきたいと思ひます。最初のところで床呂先生がムスリムの女性のヴェールの写真を見せてくださったのですが、そのイメージと比べると、多分だいぶ違っているものになるかと思ひます。

#3

こちらは先月、東京で行われた東南アジアのムスリムファッションショーの写真です。こちらをご覧いただきますと、色も非常に鮮やかですし、まず顔が出ているところがすごく大きな特徴だと思ひます。いろいろな国の人が出展していたのですけれども、例えばこれですとインドネシアのバティックという布と合わせたもので、フォーマルな形のものですが、こちらはウエディングドレス風になっています。やはり肌の部分を非常に多く覆っているところと、あとはヴェールが付いているところが特徴になっています。

普段着でもちよつと着られるような感じのカジュアルなスタイルのものなど、いろいろな

種類のものがあります。

#

これがちょっと面白かったのですが、第四部の最初に出てきたのがこちらのファッションでした。一般的には顔を隠さないというお話をしたのですが、こちらは目の部分だけ覆っているものになっています。

ということ、顔が出ているということ。ただし、体の肌の露出を非常に抑えたスタイルというところが共通しているところだと思います。

逆に日本の企業も今東南アジアにどんどん出ていこうというところで、これは西陣織と合わせたヴェールなど、いろいろなものが開発されてきているようです。

4

今日の発表は「ヴェールに関する語り」ということで、ヴェールを着けていること、あるいはヴェールについて、ヴェールを着けている人に対して、どんな語りがなされているかというところをまず見ていきたいと思います。それと、顔に関することと合わせて見ていきたいと思っています。

ヴェールに関する語りは、当然といえば当然なわけですけれども、宗教的な理由がまず語られるのですが、それ以外に関することも非常に多く語られるという特徴があります。これは後の方でまた見ていきます。

5

ヴェールに関する語りについては、ヴェールを着用している女性自身の語りと、また周囲

3

東南アジアのムスリムファッション

2016年11月22日～23日

東京

ハラールエキスポジャパン

Tokyo Modest Fashion Show



の人たち、特にヴェールを着けない男性がそれをどのように語るのかということも見ていきたいと思います。

#6

まずインドネシアのヴェールについて話をしていきます。

#

先ほどファッションショーの写真を見ていただきましたが、ヴェールはムスリム服というファッションとセットになっています。「アウラットを覆う」と書いてありますけれども、ムスリムの人が隠すべき部分を隠しているスタイルであるところに特徴があります。アウラットがどの部分に当たるかというのは、解釈によって少し違いがあります。

#7

これは礼拝をしている様子なのですが、一般的には、インドネシアの場合ですと顔と手のひらは出てほしいところとなっています、それ以外の部分がアウラットになっています。ですから、これは礼拝着という少し特殊な服ですけれども、それを先ほどのようなファッションに適用するとこの写真のような感じですね。やはり髪の毛は覆っていて、また肌の部分もかなり覆ったスタイルになっています。

#8

これは「クルアーンの記述」というところが背景になっています。「女性は出ている部分は仕方がいけれども、それ以外の美しいところを隠すべき」、あるいは「ヴェールは胸の上

#7



アウラット

を垂れなさい」など、そういう記述がクルアーンの中にあつて、それに基づいてムスリムの女性たちは肌を覆っていることになるわけです。先ほど申し上げましたとおり、書き方がかなり曖昧という点がありますので、どの部分まで隠すかはかなり個人差があります。

9

例えば、これはヴェールを着用している女性の語りです。「ヴェールは宗教的な教えに基づいているものであつて、アウラットを見せないように閉じるためのものである。アウラットを閉じることは尊敬・尊重されることにつながる」と語っています。

#

ということとで、インドネシアのヴェールは顔の出る形のもののが一般的です。ただし、色や形、素材、大きさについてはかなり多様なものになっています。

10

今はかなりヴェールの着用が進んでいるインドネシアなのですが、実は、以前はそれほど着用が一般的ではありませんでした。人口の約9割がムスリムの国ではあるのですが、それほどヴェールの着用がされていませんでした。こちらのスライドに出した写真は二〇〇一年に調査地で撮ったのですが、婦人会の集まりの写真です。

11

それに対して、こちらが二〇一三年に撮影した写真です。見比べていただきますと、同じ会を撮ったものなのですが、ちよつと写っている人数なども違いますが、ヴェールを

10

(2) インドネシアにおけるヴェール着用

人口の約9割がムスリムのインドネシア
ヴェール着用=以前は一般的でなかった



2001年

11



2013年

着けている人が圧倒的に多くなっているのがご覧いただけるかと思えます。

##

こちらはもう少し前の時代になりますが、一九七〇年代から一九八〇年代にかけては、イスラーム復興の影響を受けてヴェールを着ける女性が非常に増加した時代でした。そして、一九八二年には公立学校で全国共通の制服が導入されまして、実質的にインドネシアではヴェールの着用に対して禁止、あるいは制限がかかった時代というになります。ですから、この時代にヴェールを着用する人は非常に強い意思の下で着用する女性だったということがいえます。

#12

こちらが二〇〇一年に撮った高校の制服の写真ですが、これはもう着用が認められた後です。ので、ヴェールを着用している人としていない人が交じっています。

#13

一九九一年になりますと規定外の制服着用が認められて、ヴェールの着用者が少しずつ増加していきました。自発的に着用する女性も増えていきました。

#14

特に一九九八年のスハルト体制の崩壊後は非常にヴェールの着用が進みまして、二〇〇〇年代になりますと、最初の写真で見ただいたようなおしゃれなヴェール、あるいはファッションなムスリム服が流行するようになっていきました。ヴェールの着用者が拡

#12

高校の制服 (2001年)



大する中で、ヴェールに対する評価も変化していきます。

#15

今日では逆に着用者がかなり多数派になったということで、自発的に着けているという面ももちろんあるのですが、実は周囲からの社会的なプレッシャーも影響しているのではないかと私はみています。

#16

ヴェールの種類ですけれども、まずクルドウンと呼ばれるヴェールがあります。こちらはかなり古い時代から着けられていたもので、このように一枚布になっているものを巻いて着けるスタイルになっているものが多いです。

#17

それに対してジルバツプといいますのは、髪がかなりしつかりと隠れるタイプになります。このような感じで縫ってあって、顔の部分だけが出るようになっていいるものもあります。

#18

あるいはヒジャブというものが、最近すごくはやっているのですが、これはかなり体を覆う部分が多くて、髪の毛も出ない、なおかつおしゃれなムスリム服です。それとヴェールがセットで着用され、このヴェール自体もヒジャブと呼ばれます。

#16

(3) ヴェールの種類

①クルドウン

髪が見えるゆるやかな
ヴェール



#19

それに対してこちらのチャダルは着用者が少ないものですけれども、下半身までの長さがあるもので、目以外を隠すということで、顔の部分をかなり覆っているとところに特徴があります。あとは上下が同色になっていて、かなり暗い色で構成されているものになります。

#20

こうしたヴェールの多様性については、どういうものを選ぶかというところ、また着け方によって、自分がどういうムスリムであるかというアイデンティティが主張されることがあります。

#21

次に「見せるものとしてのヴェール」というところについてです。

#22

ヴェールは髪を覆ったり、体の部分を隠したりするものであるわけですが、同時に人に見られるもの、あるいは見せるものでもあります。顔の形に合わせたヴェール、つまりどういうものが似合うかというのが、ヘアスタイルではないのですが、そういうものが意識されたり、あるいはヴェールをアレンジすることもします。

##

これが顔の形に合わせたヴェールの例ですが、顔の形が丸い人はこういったヴェールの方が似合う。これは右側の印が付いているものの方がよく、真ん中のバツが似合わないという

#19

④チャダル

下半身までの長さで
目以外を隠すヴェール
上下が同色



ことなのですけれども、こういう形でどのように見せるかということにも、つながっていることがお分かりいただけるかと思えます。

こちらはヴェールのアレンジの仕方を載せた本で、いろいろなアレンジがなされています。

#23

人に見せるものでもあるというところで言いますと、インドネシアの人は写真を撮ることにこだわりがある人が非常に多いと思うのですけれども、SNSにアップすることも多いです。これはインドネシアの友達を浅草に案内したときの写真です。カメラを向けると、昔だったら四人が真つすぐ並んで撮るようなものが多かったのですけれども、これは別にどうしてくださいと言ったわけでもないのですが、彼女たち自身がポーズを取って、どのように見せるかをきちんと意識して撮られている写真です。

「場面設定」と書いたのですが、こちらの方は、ある場面るときにどのようにしてそれが写るかというところを意識して、あえてカメラを見ずに何かを一生懸命見ている図を作ってみたり、あるいはポーズもこちら側に顔を向けてとかいうところで、彼女たち自身の中で他の人に見せるときに何を伝えるかによってそれを変えていたりします。表情ももちろんすごく豊かで、笑っているだけでなくて、驚いた顔をして撮ってなどというようにして、一緒に写真を撮るとそれがよく伝わってきます。

#24

「出ている部分の装飾」というところで、ヴェール自体も非常におしゃれなものが多いのですが、そのヴェールにブローチを着けたり、ピンを刺したりということでおしゃれをして

います。あるいは、出る部分の手のおしゃれもなかなか大事なもので、指輪をしている人もともと非常に多いのですが、それと腕輪、特にこれは中東のメッカ巡礼に行ったときに向こうのデザインのものを買ってきて、それを着けたりします。

また、マニキュアは礼拝をするときに取らないといけないこともあって、ムスリムの人はマニキュアを避ける方が結構います。けれども、ヘナを使った爪に色付けというのはそれをしたままでも礼拝をすることができますし、また、イスラーム教徒としても問題ないということ、ヘナで色を付けるとかなり鮮やかなオレンジになるので、普通のマニキュアとは違うものと見ても分かります。

足はあまり見えないのですが、アंकレットを着けて、こちらはどちらかという音を聞かせる感じで、音によって着けていることが分かり、なおかつそこに注目が集まるというようにアクセサリーになっています。

##

こちらは先ほどのファッションショーの中で一コマなのですが、手の甲にヘナの染料で絵が描いてあるもので、これはインドネシアではあまり一般的には見られないものかなと思うのですが、こういうものもあります。

#25

先ほどのマニキュアの話と少しつながっているのですが、ムスリム性の強調というところていきますと、お化粧についてはあまり派手なお化粧をしないことよってムスリムであることを示すという人もいます。非常にナチュラルメイクにして、控えめにする人もいます。

先ほども眉の話が出ていましたが、眉毛をあえて剃らなかつたり、眉メイクをしないとこ

ろを強調する人もいます。これはなぜそうするのかと聞いてみますと、アララーがつくつたものに手を加えるのは良くないということで、あえて自然の姿を見せることによって、自分がいわゆる正しいムスリムであるところを強調しているのだと言います。

#26

次に、「ヴェールの着用と与える印象」に行きますが、こちらについては少しデータが不足している部分がありますので、あまり確定的なことは言えないのですが、今、分かっている範囲でお話したいと思います。

#27

まずヴェールについては、閉ざすものであるということを彼女たちも語るわけですが、これは髪を覆うだけではなくて、実は他者との接し方にも影響を与えるということで「見えないう境界をつくる」というような表現が取られることもあります。

#28

そして、「ヴェールと行動のバランス」というところで言いますと、ヴェールを着けたらいわゆる正しいムスリムとしての行動が求められるということと、あとは、これは周囲の人が語ることなのですけれども、ヴェールを着けると排他的になるというような表現が取られる場合もあります。

#29

例えばこの事例の二〇代の女性はヴェールを着けた女性なのですが、もともとは着けてい

なかったというところで、自分の母親が、自分がヴェールを着けるようになったときに「排他的になるのでは」と心配した。なぜそのように考えたのかというと、食堂を営んでいたその母親が店に来るヴェールを着けた学生たちに対してそういう印象を持っていたということ、また「ヴェールを着けると異性と接しにくくなることも懸念していた」と語っています。

30

これは店に来る女性に対して母親が感じていたということで、女性対女性の間でも、排他的というところが意識されていることがこの発言には出ているかと思えます。

31

また、特に大きなヴェールを着用している人に対しては、「表情が固く見える」「あまり笑わない」という言い方をされる場合もあります。こちらは、例えば特に異性に対しての接し方というところでいくと、距離を置くという意味でこのように見られるのか、それとも印象でそのように語られるのか、については明らかにはなっていないところではありますけれども、こういう語り方もされます。

32

目の部分しか出ていないチャダルを着用している人に対しては、いろいろな語り方がなされます。例えば、たまたま学校でチャダルを着けている女性を見た事例では、先生が名前を呼ぶときに、間違えて名前を呼んでしまったということで、誰だか分からないということ、言ったら、そのヴェールを着けた女性の方は「別にそれが誰なのか、聞いてくれればいいんですよ」と言っていたのです。けれども、やはり呼んだ人の方は「誰だかなかなか認識する

ことができない」ということを、問題に感じていたという一幕でした。

33

ヴェールとチャダルを着用している人についての発言というところで見ますと、ヴェールを着けると女性は尊敬されるとあり、これは男性側からの発言ですが、それは「イスラームを理解していることを意味しているから」ということと、「道で男性たちが声をかけにくくなる」というようなことを言っています。

34

さらに、先ほどの「チャダルのように顔が見えないときには、さらに声をかけづらくなる」ということを語っています。それについては気持ちの問題が影響していて、「顔が見えるのと見えないのでは違う」とこの人は言っています。そして、特に「口が見えないと話がしづらい」ということを言っています。

35

次は、ある結婚式での事例なのですが、ジャワの結婚式は非常に多くの人を招いて結婚式をするのですけれども、そのときに必ず料理が振る舞われます。

##

そして最後、結婚式が終わりますと、こうして花嫁・花婿が入り口に立って参加者たちを送り出すのですが、このときになって、チャダルを着けた人たちは、元の結婚式には参加していなかったのですが、最後の部分だけ来て、お祝いを渡して帰るということをやっていた

という一幕がありました。

36

通常は結婚式に参加するということは、みんなと一緒に食べることもつながっているのですが、後から来たチャダルの女性たちを見た人たちは、「チャダルを着けていると、物が食べにくい。だから、ああいふ参加の仕方をしたのではないか」と語ったり、あるいは「他の人の目に触れなくなかったのではないか」という語り方をしている人もいました。

37

大きなヴェールやチャダルというのは人の関心、特に男性の関心を引かないようにするためという発言がよく聞かれます。そして、こうした大きなヴェールやチャダルを着けている人は、イスラームの中でもいろいろなグループがあるわけですけども、その特定のグループ、自分とは違うグループに所属している可能性があるというところで、先ほどのように、排他的や心理的な距離などにつながってくるのだと思います。

38

ということ、ヴェールを見れば、どういうグループに属している、どういう人なのか、何となく分かると彼女たちは語ります。

39

最後に「ヴェールの着用に関する発言」というところに行きます。

#40

「ヴェールの着用に関する女性の発言」ということで、これはヴェールを着用している女性がそのことをどう語るかというところです。こちらのアフィという女性は、ヴェールは今では「効率的」かつ「かっこいい」から着ける人が多いということで、時代を経て、かなりヴェールを着ける意味が変わってきているところに焦点を当てた語りをしています。最後の部分で、ヴェールを着けるとききちんとした印象を与えて、同時に若く、かわいらしく見えるということ、で、「ヴェールを着けることによって魅力が増す」という発言をしています。

#41

他の女性について見てみますと、こちらは先ほどの発言とも少しかぶっていますが、宗教的な意味以外に、着けていると男性から声をかけられないというような効果もあるということ、で、ヴェールは閉じるためのものであって、男女間に境界を設けるためのもの。

そして最後のところでは、今のヴェールはいかにかわいらしく魅力があるかが優先されているということ、やはり外見と関わっているというような発言をしています。

#42

逆にヴェールを着けていない女性について聞いてみますと、まだ着ける準備ができていないからということ、重要なのは服装という外見ではなくて信仰の心であるというようなことを語っています。「ヴェールの着用者は宗教的により良いという他に、ファッションのため、あるいは威信のためにそういうものを着けているのではないか」と、自分はヴェールを着用していないこちらの例の女性は語っています。

#43

その他に「ヴェールを着けるとよりきれいに見える」「ヴェールが似合う」「若く見える」といった発言が聞かれました。特に「若く見える」については、やはり髪の色が見えないということで年がかなりごまかされる。また、実は白髪があったとしても、それを隠してしまうことによって、若く見えるのだというような語りをする人もいます。

#44

男性の側、こちらでもヴェールを着用していないわけですけども、その人たちがどう語っているのかをみますと、最初の例にあるスポモという男性は「ヴェールはイスラームの象徴であって、着けているとその女性がムスリムであることを示すことにつながる」と。また、「ヴェールはその女性の敬意さ、品の良さ、ルールを守ることを示すことにつながるために、ヴェールを着ける方が好ましい」と言っています。

#45

他の男性は「ヴェールの着用は望まないことが起こるのを防ぐことができるために良いと思う」と肯定的に語っているのですが、きちんと体を隠すことによって男性の欲望を避けることができる。そして、「ヴェールを着けていると宗教的にきちんとした人だと分かる。着けていた方が上品に見える」と言っています。

#46

他の男性は、「ヴェールを着ける意味は大きく時代によって変化していった」と発言していますが、「今はトレンドになっている」ということで、以前は宗教的な意味を理解して、

行動がそれに沿う人だけが身に着けるものだった。しかし、今は着けた方がかわいく見えるなどの理由で着けることも珍しくないといいことで、最後の部分では、「ヴェールを着けると男性が女性に対して抱く欲望を抑えることができる」というようなことを言っています。

#47

ヴェールに関する発言を見てみますと、ヴェールを着けている女性自身はヴェールについて、もちろん宗教的な意味についても語りますし、着けることによって例えば男性がからかいの声をかけてこないなどの効果や影響についても語っているのですが、それに加えて、外見や魅力、若く見えるなど、いわば着けることによってプラスの効果が表れるというような語りをしているところがあります。

#48

それに対してヴェールを着けていない人の方、特に男性の場合は、やはり着けることの効果や影響について語るところは共通しているのですが、それに加えて、上品さや敬虔さなどの面を強調した語りをしているところで、外見について魅力が増すか、増さないかなど、そういう面についてはあまり語っていないところが少し特徴的だと思えます。

同じヴェールでも、いろいろなタイプのものがあるのですが、それによって与える印象もさまざまあり、あるときには排他的に見えるものにもなり得るし、逆に魅力が増すような、おしゃれなものとしても見られるということ、非常に評価もさまざまになっています。今後の課題としては、出ている部分の顔についての評価がそのことによって変わるのか、変わらないか、そのあたりのことをもう少し調査を続けてみたいと思っています。私の発表は以上です。ありがとうございました。

(床邑) 塩谷さん、どうもありがとうございました。

私も東南アジアの島嶼部で研究をしているのですけれども、塩谷さんの話にもありますが、私が最初に東南アジア島嶼部のイスラーム圏を訪れた一九九〇年代ですと、まだあまりこういうスカーフやヴェールの着用はそれほど多くなかったような気がします。

他の例えばフィリピン南部のイスラーム教徒にしても、他のキリスト教徒と変わらないようなTシャツにジーンズといった格好が多かったのですが、それが最近では、目だけ出す、中東でいうニカブに当たる、インドネシアのチャダルのようなものは、まだそれほど多くないのですが、少なくとも髪の毛の部分は隠すというようなパターンは非常に多くなっています。

これはもちろんインドネシア・東南アジアにかかわらず、二〇世紀後半以降の、いわゆるイスラーム復興の流れとももちろんリンクはしているのですが、今日の塩谷さんのご発表からは、単にそういうイスラームという枠、もちろんそれは非常に大事で前提ではあるのですが、その中で非常に実は細かなニュアンスといえますか、おしゃれの追求など、宗教以外の要素も、実はかなり孕んでいるというような部分も見えてきたのではないかと思います。ありがとうございます。

それではプログラムに従いまして、発表者としては最後のご発表になろうかと思っておりますけれども、AA研の吉田ゆか子さんから、バリの芸能における顔をテーマにお話をさせていただこうと思います。

吉田さんは、昨年のこの顔シンポでも、ご発表を頂きました。そのときにも紹介させていただきましたかと思いますが、バリの島の特に芸能について、文化人類学、芸能に関する人類学的なアプローチで、まさに人類学の場合、先ほど方法論の話がありましたけれども、参与観察というのが大きなアプローチの一つになります。吉田さんはまさにその参与観察

(participant observation) の手法を使って、自分自身もバリの舞踊の踊り手として修行を積んで、現地の村で、人前で公演なども時々されていると聞きます。今日は仮面劇の話や、それ以外の人形や化粧に関するトピックもご用意いただいていると聞いています。

ご準備の方はよろしいでしょうか。では吉田さん、お願いします。

「バリ芸能における顔―人形、仮面、化粧」

吉田 ゆか子 (A A 研)

はい、よろしくお願ひします。前回は仮面を中心に扱ったのですが、今回は少し広げて、演劇や踊りにおける化粧の顔、そして影絵劇に出てくる人形の顔などと仮面を横断的に考えてみようと思います。題名は「バリ芸能における顔―人形、仮面、化粧」です。

#2

これからお話するのは完成した研究というよりも、今後の研究の取っ掛かりのようなこと、今どういうことを考えているかを紹介するものになります。私の扱っている顔は、これまでの発表者の方々が扱ってきたような、普通の日常の顔と違うので、芸能に着目することで、どういう効果があるのだろうかということも考えます。

まず、芸能にはいろいろなタイプの顔があります。本研究は影絵劇の人形、仮面、化粧を横断的に見ることで特に顔に関するバリの身体観に迫ろうとするものですが、人形や仮面や化粧の顔は、必ずしも人間だけではなく、神々や悪霊、動物の顔なども表現します。ですから、そういうものも含めて考えられるという点が、一つ、芸能研究から顔にアプローチする上での特徴かと思えます。顔に表現される、人間とそうでないもの、神や悪霊などの存在の違いも考えたいところです。

それから、多くの場合、人形や仮面や化粧の顔は、個人の顔をどのようにかわいく見せるかというような日常的な化粧の在り方とは違って、定型の役柄を表しています。それは社会に共有されたイメージとして、あのキャラクター、あの物語の登場人物はどういう顔をしているなど、そういうイメージを物に落とし込む、具現化することによってその役柄をマーク

するもので、日常の自分らしさの表現とは違うわけです。ですから、芸能に現れる顔の分析を通じて、顔の諸部分の特徴がどのようにして特定の役柄、その性格や身分を指し示すのかを考えることができると思います。

#3

これは、インドネシアのバリ島の地図です。先ほどのジャワはこのあたりの話だったと思います。先ほどの話はムスリムでしたが、バリはヒンドゥー教徒が多数派です。彼らはインドネシアの中では、宗教的なマイノリティです。また、バリにはヒンドゥー教が入ってくる以前から存在した、自然崇拜や祖霊崇拜なども残っていて、それとヒンドゥー教が混ざった、研究者たちはそれをバリ・ヒンドゥーと呼んだりしますが、そういう宗教を信仰していません。

今日はあまり話に出てこないのですが、ムスリムの女性たちの先ほどの隠すという話と大きく違うのは、ヒンドゥー教に関係しているバリ芸能では、比較的肌の露出が多くみられるという点です。女性演者も露出が多く、顔や髪だけでなく、両腕や肩も覆わない衣装を纏う演目もあります。ですが、今日はそういった露出の多い衣装の演目はたまたまですが、扱いません。

#4

人形劇、これはワヤン (wayang) と呼ばれるもので、ジャワの方にもあります。バリとはまた少し人形の形状などが違います。

#5

バリの場合は、こういった影絵人形を使った劇をお昼にやることもあります。「ワヤン・ルマ」と呼ばれ、「昼の人形芝居」といった意味ですが、これは人間に見せるものというよりは神様に見せるために儀礼の場で上演する演目です。使っている人形は夜に使う影絵人形と同じものになります。ただし、昼間なので人形の色なども見えるわけです。

#6

夜になると、影絵芝居をやります。これは、神様に向けていた昼の人形芝居とは違って、人間に向けたエンターテインメントという色彩が強いものです。影絵芝居といっても、これは影絵ではない側からの写真で、上演家の背中が写っていて、こちら側が人形です。この向こう側にお客さんがいます。観客はこの写真のようにスクリーンの裏側に来ることもできるので、人形の影だけではなくて、人形そのもの、人形に付いている色も見ることができます。

#7

しかし、一般には、このように裏側、影側から見る人が多いです。短いビデオを再生します。ちょっと観客が映り込んでいますね。

——ビデオ上映——

これはバリの影絵、ジャワでもそうですが、一人の影絵師が全部の人形を操っていますので、一度に四つを同時に動かすことができます。最大二個しか動かないわけですけれども、それ以外はただ突っ立っているような形になっています。人形は、右・左・右・左とひっくり

り返ることによって、こつちを向いたり、あつちを向いたりができるようになっていきますので、基本的に横顔の人形が多くなります。

#8

上演されるストーリーは、「マハバラタ」が一番多いのですけれども、あとは「ラマヤナ」、両方ともインド由来の物語です。それから、バリの歴史物語の「ババッド」も、たまにやります。「チャロナラン」という物語をやることもあります。

登場人物は、一番ポピュラーな「マハバラタ」や「ラマヤナ」の話で言うと、神々や人間に近い神々、王子様やそれに仕える人々などです。これは「ガルーダ」という鳥の形をした神様で、これは「ハヌマーン」というサル神様です。それから、悪霊、魔物のようなものもたくさん出てきます。

#9

神々や悪霊の話をもっと人間に分かりやすい形で解説しながら物語を進めていくストーリーテラー役も登場します。これは一番人間っぽい人形なのですけれども、王様に仕える親子という設定です。これは善側の王様に仕えている親子になります。

神々や魔物たちは歴史の時間を生きているという設定なので、彼らは普通のバリ語ではなく、カウイ語という古いジャワ語を話します。それは、一般にそこで見ている観客たちにはあまり理解できない言葉なので、このストーリーテラーたちがバリ語に翻訳をする役割も担っています。ですから、彼らストーリーテラーたちは観客と神々や悪霊たちの間にいて、いろいろ解説してくれる存在です。

#10

人形の造形や色は、登場人物ごとにかなり様式化して決まっています。頭に何をかぶっているか、顔がどんな形であるか、体がどれぐらいの大きさか、といったことから役が分かります。ですから、いちいち「この役は何です」と上演者が言わなくても、影絵をやっている途中にその影が現れたら、観客には「ああ、今、この役が現れたのだ」ということが分かるわけです。大体が善と悪の対立の物語で、良い役は右側から出てきて、悪役は左から出てくるので、その点でも登場人物の役割がマークされます。

人形のうち可動部は、手、それから先ほど紹介したストーリーテラーのような人形は口も、顎がぱくぱくと動きます。特に役柄を表す、あるいは役柄の性格を表す人形の形のポイントとしては、目・歯、手の動きや形があります。また、(スクリーンの裏側から見るのであれば)人形の体の色も役柄の性格を表わしています。

#11

目の表現は、洗練された役柄 (*alus*) か粗野な役柄 (*kasar*) によって異なり、それは大体善と悪に相当するのですが、洗練された役、これはアルジュナという王子の役なのですが、彼のように細い目をしています。 *sumpe* といって、先行研究の整理によると、洗練され、運命・役割・倫理を理解しているような役柄のときに使われる目です。他方、これは *dedelangan* といって、粗野な役の魔物などの目で、見開いています。粗野でコントロール不可能な力などを表しています。もう一つのこれは *pijak* といふ、この目をした役柄は少ないのですが、知性や口やかましさを表しています。最後にこちらの *guling* はちょっと垂れた目ですが、瞑想への傾倒や他者との同調を表わしています。これは、悪者側に付いてくるストーリーテラーの目です。

というように、目が様式化していて、それによって性格が表されています。

#12

目に加えて、歯の表現にも様式があります。平らな歯、これはあまり歯が見えませんが、目立たない歯ですね。それは浄や文明化されているというイメージです。それから、とがった歯は不浄であって、動物性を表しています。

#13

肌の色は、詳しく話すと長いのですけれども、白・黄色・黒・青・赤のそれぞれが神格と結び付いていて、その神格の特徴が、(ここに書いたような)色のイメージとつながっています。白が一番神聖な色です。ハヌマーンというのは猿の姿をした神なので、牙があるけれども体は白いです。他は省略します。

#14

先述のように色に関しては、それぞれの神と結びつくコスモロジーとの関係で恐らく意味が出てくるのですが、目と歯に関してはもう少し文化的な背景を説明したいと思います。

まずバリの身体観の特徴として、頭部を一番神聖なものとして扱います。足が一番不浄に近いとされます。バリの人々にとって、上が浄で、下が悪霊たちのいる不浄な世界なのです。人間はその神の世界と悪霊の世界の中間にいます。体自体が一つの宇宙を形成していると概念化されています。そしてその身体の中で、頭は一番神聖なところとされるのです。ですから、例えば相手の頭部をたたくのは、非常に失礼なこと。バリに行くと、子どもの頭をなでてはいけないとも言われます。

それから、先行研究では、五感の中で目を重視する傾向も報告されます。たとえば、視覚はこの世の真実を見分ける器官だと言われるそうです。言葉で伝えられる、聴覚で伝えられる場合と違って、視覚は、うそを見破り、真実を知ることができる器官とされます。また、目が見えない人のことを *buta* というのですが、これは悪霊を指す *buta* という言葉と同じです。そういうところからも、感覚の中での視覚の重視の傾向をよみとることができます。

また、芸能における魅力のことを、タクサー (*taksu*) といいます。これは神から賜る力、カリスマのようなものです。それが *caksu* というサンスクリット語の「目」「見るところ」を意味する語を語源としているとされます。

また、「見ること」をバリ語で *nyurianin* と言うのですが、その語源が *surya* (太陽) です。バリは今ヒンドゥー教と言っていますけれども、もともとは自然崇拜、特に太陽神の信仰がありました。以上の複数の事柄が相まって、バリでは目と視線が非常に重要なのではないかと考えられます。

#15

他方、歯に関しては、歯のどがつている部分が動物性の名残だとされます。バリでは成人式のような通過儀礼で、歯の先端を削ります。これはその人の動物性、あるいは「穢れ」という言い方もされますけれども、その穢れを除去する意味で行われます。男女とも、結婚する前にこの儀礼をうけます。魔物の人形の歯を尖らせるのも、こういった身体観を背景にしたことと思われれます。

#16

これまで影絵について見てきました。次に仮面劇について、去年の内容と若干重複します

が、トペン (topeng) という演目を紹介したいと思います。

#17

トペンは王国時代の歴史物語を上演するもので、影絵や人形芝居と同じくらい頻繁に上演されます。題材が歴史物語であるため、登場人物はほとんどが人間です。この写真に写っている役柄はやや例外で、人間でありながら半分神格化した存在です。超自然的な能力を持った伝説の司祭という役どころです。王国時代の話ですので、それ以外には王族や貴族たち、王に仕える従者たち、そして王を助ける村人たちが登場人物となります。

#18

この仮面舞踊劇の登場人物の顔を先ほどの影絵人形と比較してみましよう。まず仮面劇、トペンは一人で上演することも多いのですが、衣装はそのまま、仮面と頭の飾りだけを変え、違う役柄を次々と表してゆきます。ですから、全身の中で、頭と頭部が非常に重要であるということが分かります。また、先ほどの人形よりもサイズ的にもかなり大きいので、細かい顔の描写も見ることができます。

それから、先ほど述べたように、登場人物が皆人間である点も特徴です。また、影絵のときは横顔でしたが、仮面になると立体的になります。横顔も見られますが正面から見た表現もあって、これが観客に視線を投げかけるというもう一つの機能として利いてきます。後でそのことについても話します。

目と歯と顔色のシンボリズムは、基本的に先ほどの人形劇とかなり連続していると言えます。例えばこれは王の仮面で、王はバリでは半ば神格のような存在なのですが、白く塗られています。白く、目も細く、歯も平らであるところは、先ほどの洗練された王子の人形と共

通しています。先ほどの人形にはなかったものとして「第三の目」ともいわれる、眉間のところの装飾、また王族や貴族の仮面には、頭にも装飾がつけられるという特徴があります。今日は仮面を持ってきたのですが、これも同じ王の仮面です。

#19

この王の下で働く大臣たちも登場するのですが、その一つがこの「強い大臣」と呼ばれるものです。この強い大臣の仮面はどちらかというと、先ほどの魔物に近いような、見開いた目をしています。それから、赤みを帯びた肌。この赤というのは火の神のイメージとつながっていて、強さやエネルギーのようなものを表すとされます。口は閉じているか、あるいはこのように少し開いて、真つすぐな歯がのぞいている場合が多いです。

もう一つ、珍しくこの演劇に動物的なものが出てくる例として、豚の顔を持った王の物語があります。この写真のように顔が豚で、やはり牙が出ていますね。それから、動物なので目が見開いていて、舌が出ています。では「強い大臣」の踊りのビデオをご覧ください。

——ビデオ上映——

#20

これも「強い大臣」の仮面なのですが、先ほどの強い大臣の仮面のように少し目が見開いていて、前に出っ張っているのが分かりますでしょうか。

#21

ここで仮面の視線と観客の関係について考えてみましょう。仮面職人は、目、それも黒目

を入れる段階が一番難しいと言います。それは目の形だけではなくて、黒目を置く場所によつてかなり顔が変わつてしまうからです。そのときに職人が何を考えるのかというと、仮面がどのように観客と関係を結ぶのかということですね。

ある職人は、こういう王の仮面の場合には、目を少し真ん中寄りにすると言っていました。どこを見ているのか分からない、ちょっとトランスしているような、神がかっているような感じの目がいいのだと。

その職人は、逆に「強い大臣」のときには、観客を見返すような、観客のところをちょうど、視線が行くような目にするものもいいのだとも言いました。

それから、演技でも、目が動いている、目が生き生きしているように見えることがいい上演の一つのポイントになります。

先行研究でも、仮面の目が観客の意識に影響することが指摘されてきました。例えば吉田憲司さんは「視線の非対称性」を指摘しています。通常人間が相手と目を合わせ続けることはなかなか出来ないのですが、仮面であれば、本物の顔とは違って人はその目をずっと見ることができません。同時に、仮面をかぶっている人も目の前の相手の顔をのぞき見ることができません。このように、仮面を着けたときに普段と違う、演者と観客との視点のやりとりがあることを指摘しています。

他方、大橋力さんは、トペンとは別のジャンル、チャロナラン劇に出てくるような仮面を分析しながら、仮面の見開いた目にはトランスを引き寄せる効果があると言っています。実際、バリでも、こういった仮面を怖いと感じたり、直視しないようにする人は少なくありません。トペンの場合、観客が仮面の目をみてもどうということはないのですが、このチャロナラン劇のランダの仮面に關しては、例えば上演中伴奏を担う奏者たちのなかには、その目をあまり見ないようにすると言っている人もいます。つまり、必ずしも仮面の顔だからとい

て、吉田憲司さんの論のように、その目を直視できるわけではないのです。いずれにしても、その仮面の目や視線のあり方が役柄や役柄と観客の関係を定める大きな要素であるといえます。

#22

他方、道化面はやや様子が違ってきます。道化 (bondres) は、基本的にはカーストで言う一番下の平民 (スードラ) の人たちという設定です。彼らは王族や貴族と違って、汚い顔をしています。左右対称が崩れていたり、顔色も汚れた色で、また悪い歯並びをしています。そういうことが間抜けさや面白さにつながっていくのが道化面です。

次から次へと出てくる平民役がみな変な顔をしていることを妙にも感じるのですけれども、バリのヒンドゥー教の中では、そもそも人間が不完全な存在だということが大前提の認識としてあるわけです。輪廻転生の世界観の中では、前世のカルマによって今世があると考えるわけですが、もし前世の行いが完璧であれば、人は再び人間に生まれるのではなく、神になると考えられています。ですから人間に生まれてきたこと自体が、神のような完璧な存在ではないこと、何か不完全なところがあることの証でもあります。(神に近い王や貴族との対比で) 平民を表現する際に、非常に不完全な顔が出てくるのは、このヒンドゥー的な人間観が関係しているのだろうと考えられます。またその不完全さの表現として口がポイントになっているという点も一つ注目したいところです。

#23

最後に舞台化粧の話をしします。

#24

舞台化粧と仮面とを比較してみましよう。共通のところも多く、化粧であっても仮面のように定型化した役柄の顔になることが重要です。また、二人で群舞を踊るときですと、演者同士の顔が似ていることもかなり重視されます。ですから、その踊り手や役者の顔を生かすなどという話よりは、仮面のように役柄を化粧によって顔に貼り付けるというイメージです。ただし、化粧の顔は、仮面や人形などとは違って、物語や動きの中で自在に動きます。出演者たちが大勢いる楽屋で、みんな化粧の顔を作っていきますが、結構時間を、数十分、三〇分位かけています。その中でだんだん役柄に入っていくのだ、と語る人もいます。

#25

これは先ほどお見せした仮面舞踊劇の「強い大臣」に相当する役どころなのですが、演劇だと大体こういう化粧の顔になります。仮面の顔と似ているといえ、かなり似ているかなど。

これは道化なのですけれども、化粧の顔でも偽物の歯をくっ付けて、わざと変な歯並びにして、また左右対称を崩した顔になっています。

#26

舞踊のビデオをご覧ください。

——ビデオ上映——

#27

ビデオから、多くの目の演技があったというのがお分かりになると思います。顔の表情は踊りの中でも重要なのですけれども、中でも目が演技の重要なポイントです。口はむしろ閉じたままで、あまり強調されません。演劇では話すので口を開いたりするのですが、歯や口元を強調したようなメイクは道化以外には見られません。先ほどのビデオは戦士の踊りなので、戦場に向かう若者の姿を描写したようになります。化粧自体も目を強調した化粧になります。

先ほどの仮面の場合は、例えばこれは洗練された王の顔ですが、止まっているわけですね。バリの仮面劇では、能面のように一枚の仮面で悲しみと喜びを表現したり、ということはいわれません。モノトーンの、洗練さであるとか、大臣の威厳のようなことが表現されればもうそれでいいのです。他方、舞踊の場合は、甘い表情の中に厳しさがあったり、あるいは先ほどのように非常に緊張したというか、迫力のある顔の中に、急に微笑みが入ったりと、優美さと強さの往復があります。

今の子どもたちは多分あまりしていませんけれども、昔は寺院の中で、朝から晩まで舞踊のトレーニングを受ける少女や少年がいて、コミュニケーションの中で行われる儀礼などでの踊りを踊っていました。彼らは夜中に起こされて、コミュニケーションの中で行われる儀礼などでの踊り、あるいは、寝る前に涙が出るまで目を開けて我慢するということをやったり、起床直後に冷水に目をつけるなどのトレーニングをさせられていたそうです。身体的にも目の表現ができるようにつくり替えられていったのです。

#28

目の動きにも型があります。たとえば、*dedeling* は先ほどの魔物たちとして使われている

影絵人形の目の名前と一緒にです。あれに近いような見開いた目で、強さや怒りを表しています。それから、Sledetは横に目を流して、ポンと真ん中に戻すという、バリ芸能では非常に良くある動きです。NyegutとSungのは下を向いてから元に戻す動きです。Sledetとセツトになって出てくることも多いです。Sledetでバツと横を見て、次に中央に戻し、今度はnyegutで下を向いて、また視線を上げる、そういう一連の動きが良く使われます。

#29

演劇人類学の分析を見ると、目の動きが表現だけではなくて、踊り手の身体感覚にも影響してくるだろうということに気付きます。演劇人類学の研究者は、東洋の演劇には目や視線のさまざまな表現があると指摘しています。具体的には京劇やインドのオディッシー、バリ舞踊、日本舞踊などを横断的に分析しているのですが、目を強調した表現は、一つには、「見ている」ということを演技するために出てきます。それから、何かを見ているというか、一点を凝視するということがあります。先行研究によればそれは観客が明確な空間感覚をつくり上げる手助けをするとか、あるいは空中を見ることによって、この舞台上にはいないのだけれども、そこにいるという設定の人物や動物などを目で表すことを目的として使われます。

また、視線は姿勢や歩き方に非常に影響していて、舞台上で使われる視線というのは、日常の動作に出てこないような目の使い方です。先行研究では「日常的な視線の使い方に変化をもたらすことによって、彼らはエネルギーの質的变化を操作しているのだ。日常における『見る』やり方を少しだけ変えることで、彼らはエネルギーの全く新たな地平を喚起することができるのである」と、大変大きな枠で分析されています。

このことがバリ舞踊において、実際どのように起きているのかについては、まだ調査した

ことはありませんし、実際にどのように調査が可能なのか分からないのですが、一つヒントとしてあるように思います。

#30

最後のまとめです。まず、人形・仮面・化粧の顔は、バリの観客たちの間で広く共有されている役柄のイメージを具現化して役柄を指し示しており、中でも口、特に歯は動物・悪霊、間抜けさの表現において強調されていました。

それから、目の形や目の演技が大変重要であることをみてきましたが、その目の使われ方が人形と仮面と化粧では違ってもいました。人形の目は性格や地位を表すことに使われるのですが、仮面になってくると、今度は観客との関係、観客にどんな視線を返すかということが加えて重要となります。最後に、化粧の顔の場合、さらにそこに感情の変化を表したり、目線によって空間を表現し、舞台上にはいない他の登場人物を表すこともできます。演劇人類学の分析によれば、それは演者の身体全体に影響しながら、非日常的な身体性を生じるということにもなります。ありがとうございました。

(床呂) 吉田さん、ありがとうございました。本日の後半はたまたま国としては同じインドネシアの報告が二つ続きましたけれども、先ほどのイスラム圏、ジャワ島における話とはまた非常に異なった、対照的なご報告で、非常に興味深いものがあつたかと思えます。ありがとうございます。

以上で一応、シンポジウムにおける報告は全て終わりということになります。この後はコメントと質疑応答なのですが、いずれもやはり濃密なお話が続いたということもありますので、最後の短めのブレイクを一〇分ちよつとだけ入れさせていただいて、三〇分までにこち

らの会場にお戻りください。よろしく申し上げます。

——休憩——

(床島) それでは、いよいよ本日のシンポジウム、最後のパートということになりますけれども、どうぞ最後までお付き合いいただければと思います。

最後はあらかじめ申し上げましたとおり、三人のコメンテーター、討論者の先生方にご参加いただいております。東京大学の原島先生、立教大学の北山先生、自然科学研究機構の柿本先生ということで、順番的にはこの順番でと伺っていますので、まず最初のコメンテーターは東京大学の原島博先生です。原島先生はもう細かい紹介はあらためては不要ではないかと思いますが、大変有名な顔研究の日本における第一人者と言って過言ではないと思います。顔学会会長等を務められまして、専門はコミュニケーション工学と伺っております。

それでは原島先生、よろしいでしょうか。では、コメントをよろしくお願いいたします。

IV コメント

原島 博（東京大学）

ご紹介いただきました原島です。内容が濃くて正直言って疲れました。なぜコメントターにさせられたかというのがよく分かりまして、コメントターにしておくと思わないだろうとか、全部しつかり聞くことになるだろう、この年になるとそのようにしておかないと危ないだろうということで、実際しつかり聞きました。

前回、北山先生がすごいパワーポイントを作られて、今日はないということなのですが、ちよつと強迫観念に押されて、少しパワーポイントを作らなければいけないという、それもいたしました。作ったのはこれ一枚です。要するに、ちよつとこの話をさせていたかどうかということですよ。

先ほど顔研究をやっていると紹介されたのですけれども、私は自己紹介をしておかないと誤解される可能性がありますので、私の専門は工学部の電子情報工学というところですよ。コミュニケーション工学を専門にしていると言いましたが、もともとは電気通信工学が専門ですよ。

最初は数学的な情報理論から入りました。ご存じの方も多と思いますが、シャノンという人が「A Mathematical Theory of Communication」という論文を一九四八年に出しました。その枠組みの中で研究を始めた人間ですよ。大学院時代、三〇代はそういうことをやっています。

した。情報理論の学会の会長も一応しております。

その通信工学の立場で言うと、特にシャノンの情報理論などはそうなのですが、重要なのは、情報を忠実に効率的に伝えるということなのです。忠実にありのままを伝えなければ、通信技術者としては意味がないということだったのです。

実は、顔に関心を持つきっかけは、あるとき「本当にそうだろうか」と思ったのです。それはいつかというと僕が四〇歳になったときで、今から三〇年ちょっと前です。と言うと、僕の年齢が分かっけてしまいますけれども（笑）。三〇年ちょっと前にテレビ電話の研究をしていました。テレビ電話で、当然ながらありのまま忠実に顔を送ろうと研究をしたわけですが、ところが、みんな喜ばないのですよ。ありのまま、本来の通信の目的をみんな喜ばないで「嫌だ」と言い出した。そうすると、本当にありのままというのはいいのだろうか、顔というのにはありのままというのがあるのだろうかなどと、やはりそういうことがだんだん気になるようになってきたということなのです。

考えてみたら、テレビ電話はどんなに忠実に送ろうとしても、ありのままではありません。なぜなら、映っているのは平面的な顔です。ありのままではありません。それから、そのときに周りが囲われています。必ず何か額縁のようなもので囲まれている中にある顔なのです。かつ、テレビ電話の中ではいつも正面を向いています。いつもコミュニケーションするときに、正面を向いているというのは、ありのままではないのです。普通そういう形できません。要するに、違った状況をその中につくり出してしまっているということなのです。さらにテレビ電話で言うと、本当は前にカメラがなければいけません。そうすると、視線が合わないのです。やはり前に画面を見ながらやると視線が合わないという、視線が合わないコミュニケーションを許容しているということになります。そうしますと、テレビ電話で映そうとしていたのはここで言う、いわば顔でなくて、周りが四角で囲まれた顔でしか

いのではないかということであつたわけです。

こんなことを考えたなら、渡邊先生が実験のときに、顔写真ではなくて、顔で実験したいとおっしゃいました。恐らく心理学で実験をやっているのは、左側の顔ではなしに、右の四角で囲まれた顔でやっています。そのようにコントロールされた形でやると、左側の顔を扱えています。テレビ電話でも扱えていないし、心理学実験でも扱えていないと思つたのです。

そういうことを考えたなら次に、帰られた河野先生が「私、顔がないんです」とお話しをされました。そこで言う顔は一体何だろうと思ひました。恐らくそれは左側の顔ではなくて右側の顔なのでしょう。右側の顔というのは、枠組みがある、演じている顔なのです。「私、演じている顔がないんです」、そのように理解しました。

四角で囲うことで何がいいかという、演ずることができませんし、自分を隠すために四角を付けることもあるわけです。ヴェールなどは、まさに左ではなく、右化しているという、右の顔というように思ひます。

そして、「演じている顔がないんです」。演じるということは、ある意味で自分を隠すことです。ですから、自分を隠すことができないのです。自分が、隠すことはできないから、見られてゐる。「顔がないんです」ということを、左の顔ではなく、右の顔を持つていないのです。というように、僕は解釈させていただきました。ヴェールも、まさに右の顔です。

どうしても学問的に扱おうとすると、どこかで右になつてしまひます。やはりそれはちよつと気になりました。しかし、考えてみたら、われわれが生きているということ自体がもう右の顔なのです。左の顔というのは、やはり正直言つて恥ずかしい顔なのです。それを何とか右に。化粧自体、もう右の顔にすることですから、私たちは右の顔を操作しながら生きている。従つて、そこに当然ながら文化的なものが右の方には入ってきます。しかし、一方で左が気になるということで、渡邊先生も顔写真ではなく、左の方をやりたい、でもそれは難

しいということになっているのではないかと。

最初に私自身のことを振り返って、テレビ電話はまさに右しか実現していないのだなというところから、今日の話と強引に結び付けさせていただいたということです。どうもありがとうございます。

(床島) 原島先生、どうもありがとうございます。今回のシンポジウム全体に関わる非常に本質的な指摘だったかと思えます。

それでは引き続きまして、プログラムの順番ということで立教大学の北山晴一先生にコメントいただければと思います。ご準備の方、よろしく願っています。

北山晴一先生は、ご専門は社会デザイン学ですけれども、化粧文化研究者ネットワークという研究者のネットワークを主宰されています。そして、海外を含めたさまざまなファッション、被服文化、化粧等に関する文化史的な研究も行っているらしいです。

北山先生、よろしいでしょうか。では、よろしく願っています。

北山 晴一（立教大学）

原島先生は、自分がやっていることはどういうものかという、自分の研究のプロファイルのようなものを、ちよつと昔を振り返ったというお話をされましたけれども、私の場合は、今、社会デザイン学という紹介があつて、同時に化粧文化研究者ネットワークの代表だという紹介もありました。よく「あなたの専門は何ですか」と聞かれるのですが、私の場合、これがなかなか答えられない。みなさんの前では、昨年も今年も、自分の専門のうちの身体社会学的な部分で発言していますが、実は私は食文化の研究者でもあります。

最近、自分が四〇年来やってきたことを、大学院での授業科目として四つの分野にまとめてきました。一つは消費社会の問題を扱う分野。しかし、消費の問題を扱うためには、前提として人間の持っている欲望の問題を避けて通るわけにはいかない。人間は社会的な存在物であつて、生理的な欲求とは違う形で社会的な欲求をもっている。私はそれを欲望と呼んできました。消費社会の存続にとってこの欲望が非常に重要なのです。

そして、三つ目の分野が、アイデンティ論です。近代社会になって、共同体の絆が弛緩するにしたがつて自分が社会の中で何者であるかという、アイデンティの追求が社会にとつても個人にとつても、ある種の強迫観念になってしまった。その中で当然ですが、身体表象の問題が非常に重要になってきます。ところでアイデンティ論の要は他者の存在です。すると、どうしても人間関係の話が非常に重要になってくる。それで、人と人との関係性の在り様を考えることが研究テーマとして浮上する。それこそ自分だけの存在しかないところから、二人、三人と複数になって、何万人、何千万人という形の人を相手にするなどという形で、人の関係、つながり方がどんどん大きくなっていくときに、どういことが起こるのだろうかという話。そしてそんな巨大システムの話をしていると、これはほとんど政治学の

分野といってもいくらいです。しかし私のやってきたことは、できるだけ生身の人間の側からみた問題系が中心なので、それを親密社会論と呼んで授業をやってきました。これが、四つめの分野にあたります。

じゃ、社会デザインとか、社会デザイン学って何、ということですが、これらの用語を日本で（たぶん世界でも）はじめて大学や大学院、あるいは学会に持ち込んだ張本人は私ですが、社会デザイン（学）の研究と活動の対象は、個人の幸福追求の情念と社会の仕組みの改善とを結びつけることです。社会デザイン（学）は研究・教育活動でもあるけれども、実践的な活動も目指しています。

その意味で、今日のテーマ「トランスカルチャー状況下における顔・身体」は、私と社会デザイン（学）にとつてとてもタイムリーなものだといえます。

今日の皆さんのお話を伺っていて、どれも非常に充実した発表だと感じました。これだけ充実していると、コメントをする方はどこをどうコメントしていいのか、とても悩ましい。発表が素晴らしければ素晴らしいほど、コメントーターの言うことがなくなってしまうという、ジレンマに落ち込みます。

今日、床呂先生の最初のイントロで非常に面白かったのは、やはり二項対立的状況下に私たちが常に置かれているという指摘です。グローバルな人間関係、社会の関係ができれば、もう必ず逆方向に行く動きが生まれます。グローバル化の中では、個人一人ひとりも、また個人と他者との関係も大きな影響を受けます。グローバル化が進めば進むほど、ローカルな差異へのこだわりが強化されるし、そのこだわりに向けて個々人のレベルでも欲望が動員されます。このような図式は、グローバル化などの状況を持ち出さなくとも、じつは私たちが日常的に行っている実践そのものでもあります。私たちが日常的に、例えば今日はどういう服を着ていくか、あるいはお化粧をする人だったらお化粧をどうするかという選択ひとつ

とつても、常に全体的な状況と自分の個別の状況とを行ったり来たりさせながら、決めていくからです。

「再帰性の結果としてのアイデンティ」と言われますけれども、アイデンティは自分だけの意思で決まるものではない。相手のあることによつて初めてアイデンティは出てくるのだということ、植物学などでは常識です。それがまさしく今日の最初に床呂さんが言われたことだろうと思うのです。おそらく山口さんが言われたことも全く同じ流れの中でお話ではなかったかと思えます。

今日は河野先生が先に帰られてしまったのは非常に残念なのです。いろいろ突っ込みどころ満載で、ぜひお話を聞きたいなと思っていました。河野先生が言及されたヴェラスケスの「ラス・メニーナス」は一七世紀、一六五六年の作品ですが、デカルトなど同世代、同時代にこういう作品が出てきたのは少しも偶然ではなかった。河野先生の話の一番の肝は、私たちは見る存在であるばかりでなく、実は見られる存在でもあるのだということの発見だということ部分です。ヴェラスケスのあの絵が示しているのは、そのことだったのだということです。

フランスの哲学者ミシェル・フーコーの『言葉と物』（一九六六年）という四〇〇ページぐらいの本の最初にこの「ラス・メニーナス」の写真があつて、この絵がいかに画期的であるか、その意味を分析しています。先ほど河野先生が説明されたように、能動的な存在だった人間が、実は受動的な存在でもあることを描いたのだ、と。社会的な存在としての人間のアイデンティティは双方向的に決まってくるのだという、先ほどの私の話ともつながってきます。人間が受動的な存在でもあるということの象徴として、河野先生は鏡の話をしました。だが、これはまさしくジャック・ラカンという人が、実は一九三〇年代から言っていたことですが、一九四〇代後半になって発表した論文「自我機能の形成契機としての鏡の段階」

(一九四九年)の中で論じていることに、河野先生は言及したわけなのです。

いろいろこうやってお話をしていると時間がなくなってしまうので飛ばしますが、表情の普遍性と、表情が持っている個性のようなもの話も今日はいろいろな方がされました。その中で河野さんが言おうとしたのは、「コードとしての表情」ということだと思いません。これが今、原島さんがお話しした括弧付きの「顔」ということにもつながるわけですが、これも、こういう「コードとしての表情」をわれわれは小さいときから勉強し続けています。表情はまさしく文化なのです。

河野さんは一七世紀の話でしたが、実は顔研究は、一六世紀まではほとんどが骨格の研究、頭骨の研究でした。それが一六世紀以降になると、関心が表情の研究にぐーっと寄ってくるのです。なぜかという、表情を公に出せるということが、キリスト教的な制約もありますが、私たちは表情を自由に表出してもいいのだという世の中になった。ところが、その後たちまち逆転現象が起こる。つまり、じつは表情はそう勝手には出せない。つまり、社会的なコードの中にそれを入れ込まないと駄目だという制約がかぶさってくる。

一方で自分の表情、身体表現全体を自由に表出することが、ある意味では権利として出来上がってくるのですが、他方で同時に、自分の属しているような階級・組織・身分との整合性を考えながら、自己責任のもとにそれをやらなければいけない。それが文明人なのだということになってしまったのです。そういう時代がずっと今まで続いているわけです。その中で、顔を失った人、顔がないと言いはる人の問題も出てくるわけなのです。

先ほど原島先生の話された括弧の中に入った「顔」を何とかして自分のものにしようと思ってもなかなかできない人がでてきている、それがいまの時代なのでしょう。それは恐らく、彼女彼たちの存在の本当に深いところにそういう「顔」を拒絶してしまう何かが棲みついてしまったのではないかと思うのです。ですから、単純に「じゃ化粧してみたらどう？」

という形で、コロツと変わってしまうケースもあると思います。でも、その人がそれでその後ずっと良くなるかという点、そう簡単ではないのでは、と危惧します。

みなさんも経験があるかと思いますが、世の中のことを全部とことん理詰めで考えないと気のすまない人がいるのです。たちまち議論が過熱して激昂してしまふ。これは、統合失調症に典型的な兆候のひとつです。河野先生も統合失調症の話をしました。が、われわれは全部言語で物事を割り切らなければいけない、説明しきらないといけない、というような強迫観念にかられてしまった人が統合失調症のある種のパターンなのですが、表情についても同じような反応がでているのではないかと、思います。何事についてもきちんと形をつけないければ気が済まないとなってくると、それが強迫観念になってきて、逆に何もできなくなってしまう。すべて言葉で説明しなければいけないというのもそうした兆候の現れなのです。

実は、私たちが文化的な学習をどうやってきているかという点、かなりいいかげんなプロセスの中でやってきているのです。それで人生をやりくりしてきた。それが正常なのです。それを全部厳密にやっていると、私たちは精神疾患になってしまう。ある程度のいいかげんさを許容されながら、そのいい加減さにもかかわらず自分の存在を全体として認めてくれる、そういう環境の中で、私たちは自分とは何者かということを表現する術を勉強してきているわけです。それができないときに心のどこかに非常に大きな問題が蓄積されてしまうという点なのです。

河野さんが先ほど言われた「素顔と化粧・仮面の間には決定的な違いはない」ということは、それだと思えます。仮面と化粧が素顔と違うのは比較的分かりやすいのですが、素顔も実は、本当の素顔などないことを知るべきでしょう。生まれてすぐ、もう本当に早い時期に恐らく私たちは本当の意味での素顔を失っていると思うのです。そういう意味で「素顔と化粧・仮面はひとつつながり」と言ったのだと思えます。私たちは何らかの形で必ず身体表現

を行っている、せざるを得ない。そうしないと、自分が世の中、社会の中でどのような存在であるかということを手張できない。そのように私たちのアイデンティティ、私たちの生は決められているのです。

昨年もそうでしたが、吉田先生のバリの演劇の話は非常に面白く、示唆に富んでいました。バリではたしかに非日常的な空間であるけれども、時間をかけて定型化された身体技法のよなものを含んで確認する非常に大事な機会が共有されている。ところが、そういうことができない、許されない状況が今、世界中で噴出しているではないですか。まさしくトランスカルチャー状況下におけるさまざまな軋轢が、それこそ国際政治上の問題としてが出てきてしまっているのではないかと思います。

そして、塩谷先生のインドネシアのヴェールの話。とても興味深く伺ったのですが、塩谷先生は、まとめの中で二つの点に触れられていたと思います。一つは、個人的な魅力を表現する場としてのヴェールという話をされましたよね。それも単に魅力云々だけではなくて、上品さなどへの配慮もしながら、自分を社会的にどのように位置付けるかという志向も認められるという話がありました。

もう一つは、ヴェールの機能として男性から声を掛けられにくくなるということですね。これは非常に大きい問題のあることを示唆していると思いました。インドネシアのような、マジヨリティがイスラム教徒である場合の状況としては非常によく分かるのです。ところが、イスラム教徒、ムスリムの人がマイノリティの社会で、ではヴェールはどういう意味を持っているか、となると簡単には正解の出せない状況があります。それが今年ヨーロッパで大問題になったブルキニ論争というものです。ブルキニというのは、ブルカとビキニをくっつけた造語です。ブルカというのは、ほとんど顔全体を隠してしまって、目のところも本当にネットで隠されてしまうような形のヴェールです。それプラス、ビキニという、本来

だったら露出を目的とする全く反対のものを結び合わせる形で考案された水着なのです。もちろんブルキニの基本的な機能は隠すことです。これを、この夏、フランスでは、女性身体を抑圧するイスラーム原理主義のシンボルだとして社会的に禁止しようという動きと、逆に、ブルキニもまた文化的多様性の表現であり、表現の自由を認めるべきだという主張が激突し、国論を二分する議論が展開されました。ここで私の話は終わりますが、かつては、いわゆる個人の身体表象の尊重など歯牙にもかけなかった非常に保守的な人たちが、「個人の身体表象を妨げるものがムスリムのヴェールだ」などと言い出しているのは噴飯ものでした。他方で、女性の自立や女性身体の自由、文化的多様性の尊重などまったく念頭にない人たちが、ブルキニへの抑圧は文化的多様性と個人の自由とを侵害しているなどと言うのを聞くと、世の中がひっくり返ってしまったような気分になりました。私たちがいま生きている世界では、「トランスカルチャー状況下における顔・身体と異文化理解」の問題が、文字通り、身体の中を政治が突き抜けていくような状況を生み出している。それを、今年、私は夏の間にフランスに行っていてつぶさに見てきました。

顔・身体に関わる問題群はこれまでずっと、そういうことに興味を持つ人は、大先生がエッセイのような形でやるのはいいのだけれども、若手研究者がまともに取り上げる真面目な分野ではないと考えられてきました。それがどれだけ重要な分野であるかということが、いま、ようやく認識されるようになってきたのだと、昨年、今年と続くシンポジウムでの、皆さんの発表を聞いていてとても印象強く実感いたしました。顔・身体の問題の研究は、大文字の政治を語るのと同じぐらいに重要なのだということを、皆さんといっしょに主張していきたいと思います。

(床島)

北山先生、非常に示唆的な、もう一度マクロなグローバルな状況に位置付けるよう

IV コメント

なコメントを頂きまして、どうもありがとうございます。

それでは本日のシンポジウムのいよいよ最後のコメントーターということになりますけれども、自然科学研究機構生理学研究所の柿木隆介先生の方からコメントを頂ければと思います。柿木先生のご専門は神経科学ということで、山口先生とは科研などでもかねてから研究仲間でいらつしゃると伺っています。

それでは、よろしいでしょうか。ではよろしくお願いいたします。

柿木 隆介（自然科学研究機構生理学研究所）

今日は非常に楽しく聞いていました。メモを取らない人間なので、先輩お二人が一生懸命メモを取っておられるのをじっと見ながら、何もしないで、ただ端で聞いていまして、「面白かったです」で帰ろうかと思ったのですが、そういうわけにもいかないだろうと思いましたが、初めは全然用意していなかったのです。口で言おうと思ったたら、口で言うのはとても難しい分野だということが分かりまして、今、大慌てで三分間でスライドを作りまして、ここに入れたところですよ。

まず、目の話が随分出ていましたけれども、面白いのは、例えば原島先生の顔全体をお見せすると、原島先生の目のところだけをくり抜いてお見せする。情報は圧倒的に顔全体の方が大きいのですが、脳の反応は目だけの方が圧倒的に大きいのです。これが非常に不思議なところですよ。ですから、情報量の問題ではなくて、目だけを見た方が反応が大きいというのは非常に特殊なことなのです。これはもうあらゆる層で、世界中でそうです。

さらにその傾向が強いのは、子どもです。四歳から六歳の子どもは、顔全体を見るよりも、目だけを見せた方が一・五倍ぐらい脳の反応が大きいことが分かっています。大人になってくると、だんだんその差が小さくなってきます。ですから、やはり子どもははかに目が怖いか。恐らく進化の過程を表しているのかもしれないですね。そうしますと、赤ちゃんは、もつと目というのが重要なものかもしれないなど。子どもは防御本能のために、恐らく目が怖いのではないかという気がするのです。

そんなことを思いながら、それで終わろうかと思ったのですけれども、何をしているかやはりスライドを使わないと分かりませんので、今日の話に割と近い分野のところは何かと

思って一生懸命探して、ちょっとこれを持ってきました。この話をちょっと簡単にしようと思えます。

ちなみにJKT48が大好きで、いつもYouTubeで見ているのですけれども、例えば「恋するフォーチュンクッキー」はヴェールを巻いた女の人も普通の人もみんな一緒に楽しそうにやっているんで、別にあまり男性を避けたいというイメージが全然ないのです。仲川遥香というAKBから行った子がとても人気があつて、今年は総選挙の第二位ですかね。去年は第三位でしたが、でも、もう辞めるのですけれども、そんなことはどうでもいいですね。JKTの一番からずつと言えますけれども、言っても恐らく何のことか全然分らないでしよう。

1

簡単に五分間ぐらいお話します。五分間もないかもしれませんが。

顔の研究をしていると面白いのは、単純に目を見ているというのではなくて、やはり社会認知の中で重要なのです。他者とうまく相互作用するためにということなのです。

2

では、どういう研究をしているかというのと、「情動」という言葉があつて、心の動きなのですが、その中でもちょっと高度なもので「自己意識情動」というのがあります。これは罪悪感や恥ずかしさなどというのが、普通に悲しい、寂しいというよりも少し高度なものだと言われています。これがいわゆる基本情動より高次であると。

#3

こういうときに何が起こっているかというのを調べようと。なかなか難しかったのですが、実験をやってみました。

#4

リアルな恥ずかしさを喚起させるといのは、やはりこれは顔を使うのが一番いいのです。被験者の方に何も言わないで、変顔というのが結構はやっているの、「いろいろな変顔をしてくれ。写真に撮ります」と言います。何に使うなどは何も言わないでも、結構楽しそうにみんな男も女もやってくれて、たくさん変顔の写真を撮ります。それを使うのですけれども、自分でこうやっているわけで自分では見えないのですが、後で写真を見るとやはりこれは相当に恥ずかしかったりするのです。

#5

その恥ずかしいのはいいのですが、さらに高度な場合には、誰かがそれを見ているという状態になると余計に恥ずかしさが増すのです。そういう条件をつくってみました。つまり、僕たちは変顔をして、自分の顔が変だなと恥ずかしいのですけれども、これが他の人がいると、さらにその恥ずかしさが増す。本人一人で見ていると「まあしょうがないやつだ」となるのですが、やはり他人がいると「何じゃこりゃ」と、何か思っているだろうなと思うと、気恥ずかしさが非常に増すのではないか。そのときに脳の中で何が起こっているのかというようなことを研究するわけです。

#6

二台のfMRIを同時に記録します。AさんとBさんにここに入ってもらって、同時にやります。互いに顔見知りではありません。

#8

ちよつと分かりにくいスライドなのですけれども、これが自分が先ほど撮られた変顔なのです。これは相手被験者の撮影をしているわけです。二台ですから、Aさんにとって、これはBさんなのですけれども、Bさんがこの変顔を見ているという条件。それから、目を閉じさせて、見ていないという条件と両方やるのです。相手の方が目をつぶっていますから、自分の変な顔をしていても、自分にしか変な顔は見えないのですけれども、これは相手が自分の変な顔を見ているわけです。ですから、明らかにやはり違うのではなからうかということ、まず心理的なことをやってみました。

#9

そうすると、自分の変な顔に対するものなのですけれども、誰か観察者がいる、つまりBさんがいる、目を開けているという状況は、これは心理テストですが、明らかに自分だけが見ている、相手は目をつぶっているという条件に比べて、有意に恥ずかしさの度合いが増します。これが自己意識情動というものです。こういうのはやはり顔でないとできません。あるいは目でないときけませんので、やはり顔、あるいは目というのがいかに高度の意識情動に関係するかがよく分かります。

こういう条件で、自分の顔と未知の顔と書いてあるのですが、要するに自分の変な顔を他人が見ているときにどの辺が活動するかというと、こちら辺はもう解剖学的なことは忘れていただいて結構なのですが、一般的に大脳辺縁系と言われているところです。つまり一番原始的なところで、情動や本能のところに関係しているところなのです。やはり自分が見られて気恥ずかしさが増せば増すほど、そういう大脳辺縁系が活動することが分かりました。

ですから、明らかにやはり自分で自分の変な顔を見て「嫌だな、恥ずかしいな」と思うときは、明らかに脳の中でこういうところが活動しているということになります。二カ所なのですけれども、その中でも「島」と書いて、島回や島皮質というのですけれども、ここが見事に恥ずかしさの強度の増大と、ここの活動量が非常に高い相関を示します。もう一つの場所はあまり関係ありません。ですから、僕たちが何となく非常に高度な意味で気恥ずかしいと、それこそ穴があつたら入りたいという気持ちのときには、脳の中のここが活動していて、それがちょうど恥ずかしさの度合いと非常に比例するのだということが分かりました。こういう研究をやっています。

ですから、今日いろいろなお話を頂いて、「ああ、なるほどな」と、自分たちの実験系に使えるなど思ったのは、ヴェールにしても仮面にしても、そういうものが他人に対する影響をどのように与えるのかというのを、昔からの人は本能的に知っていて、それを工夫したり、要するに相手に悪い意味でもいい意味でも印象付けるために、どんなことをやればいいのかというの、ああいう仮面劇などになってきているのだなど。あるいは逆に、ヴェールをわざわざかぶせるというのは、それを見せることによつて、相手に対するいろいろな思いをシャットダウンするために非常に重要なのだなど。そういうときに脳の中がどうなっているのかを調べるのが、われわれ神経科学の研究者のやる面倒くさいことなのですけれども、こ

ういったことをやっています。

難しい話はやめにして、そういう印象を持ちながらずっと今日は楽しく聞いていました。どうもありがとうございます。

(床呂) 柿木先生、どうもありがとうございました。神経科学の専門的な立場からの非常に興味深いコメントと、まさか柿木先生がJKT48にそこまでお詳しいというのも知りませんでした。ありがとうございます。

V 総合討議

(床呂) 以上で発表とコメントを頂きまして、これから質疑応答に入らせていただければと思います。プログラムの都合上、恐らく個別の発表に関してもいろいろ、それぞれ中身の非常に濃いご報告が続きましたので、個別や事実関係なども含めていろいろあるかと思いますので、いかがでしょうか。特にもう指定するとか、仕切るといふことはなしに、フロアの方、どなたからでも結構です。佐久間さん、マイクをよろしくお願いします。

あるいはそれを待っている間に、もし先ほどの三人の先生方からコメントを頂きましたけれども、ご発表者の方では、はい。

(原島) 先ほど最初のコメントであがっていて、言い忘れたことがありまして。昨年と今年出させていた大大きく変わったこと、感銘を受けたことを申し上げますと、昨年は心理学の方と文化人類学の方、思いは分かるのですけれども、ギャップがあるように思いました。けれども、今年まさに前に三人座っていらっしゃる方が「あ、一緒にやっているな」というのがすごく感銘を受けて、昨年と今年が大きく違っている、今日の三人のようなご発表がこれからどんどん増えてくるといいなと思ったことを付け加えさせていただきます。

(床呂) はい、どうもありがとうございます。

それでは、会場の方、どなたでも結構です。もしすぐないようであれば、いかがでしょうか。ご発表者の方で、先ほど三人の先生方からコメントを頂きまして、個別の内容についても、それぞれ言及がいろいろあったかと思えますけれども、何かレスポンスなり、いかがでしょうか。高橋先生。

(高橋) いろいろあるのですが、手短かに言うと、いわゆる左の顔と右の顔という話で個人的に思うのは、左の顔は本当にあるのか、そこがまず疑問なのです。最近、私自身、ホモ・クオリタスという概念を提唱して、要は、人間はどんなにノイジーな情報でも、それが与えられれば、そこにかなりビビッドな意味を見いだしてしまう。われわれがいつも見ているのはやはり右の顔だけで、そこからまるで幻想のように左の顔をあたかもつくり出している。というか、むしろ実在するものではなくて、われわれ観察者側が貪欲につくり出してしまっているのではないかと。

なぜテレビ電話が駄目かという点、あれは要は、リアリテイが足りなくて、イメージネーションを制限するデバイスになってしまっていると思うわけです。声だけだとその先に世界が無限に広がるわけです。けれども、あそこにプアな映像があるとそれが全てになってしまつて、その先が見えないと。

われわれのコミュニケーションで、北山先生がおっしゃっていたのですけれども、いいかげんさというのがすごく大事だと思つています。特にこのトランスカルチャーの状況で、われわれも一緒にやっていますし、特に島田さん、大石さんもまさに現地に入つて、何か通じ合っている気持ちになっているのだけれども、実際よくよく考えてみると通じ合っていないと。けれども、そこで通じ合っていないことを取り立てて理屈を並べても、コミュニケーションは進まないわけです。

ですから、「通じ合っていないかも」というところで、ひとまず止めておいて、と言うと言い方が悪いですが、そこでいいかげんさを寛容に受け止めて、特にトランスカルチャーの状況では、とにかく前に、誤解を多分に含むという前提の上で進めていくという態度は多分大事ではないかなという意味で、そのいいかげんさというのはこれからトランスカルチャーの状況でとても重要になってくると思います。

そのときに、左の顔と右の顔という話で、右の顔は情報としてはもちろんプアなわけですけれども、そこから本当の左の顔のようなものを、あまりにも頑張つて探そうとすると、多分そこでコミュニケーションは、デイスコミュニケーションが起きるのではないかと。ですから、お互いに幻想を抱き合っているという状況が多分できて、それは後から思うと「はい、幻想でした」となるかもしれないのですが、でも、そういう状況は十分にあり得ます。少なくとも今トランスカルチャーの状況で、お互いの文化的バックグラウンドも分からないのが非常にある中では、そういういいかげんさを受け止めていくという態度は、取り得る一つの方法なのではないかと考えました。

また、リアルな体験という話を渡邊先生もされましたが、あれについてはわれわれで考えたことがあります。心理学者として実験刺激を見せて反応させるというのは無理なものです。リアルな顔を見せてというのは、実験としてはめちゃくちゃ大変なのですけれども、最近やろうとしているのは、先ほどゴリラ人間の話もありましたが、あなたが普段見ているものをリプロダクションしてくれ、描いてくれという、イラスト化手法を導入しようとしています。まさにゴリラ人間というのは、あれは見せてわれわれの反応を測ったところで大した話ではないのですけれども、まさに書くプロセスというのを考えていくと、もしかしたら、少しでも本当の顔というか、本当の身体表現や顔をわれわれが普段どう扱っているのかというところに、多少なりとも実証的に近づいていけるかもしれないというのが最近やろうとしている、まさに実験をやろうとしているということです。長くなりました。

(床呂) いいえ、ありがとうございます。他の方はいかがでしょうか。では、金沢さん。

(金沢) その辺の話がすごく面白くて。

(床呂) すみません。もし差し支えなければ一応。

(金沢) 日本女子大学の金沢創といいます。いろいろ赤ちゃんの研究も山口と一緒にやって

いるのですが、こういうコミュニケーションのことを昔から考えています。今日の原島先生の話、あるいは吉田先生からの話が全部結び付いているのですけれども、顔はやはり記号なのだということを今日はすごく感じました。

僕は放送大学で話をしているのです。あれは撮影するときに、撮影された映像を自分で見ると、すごく不自然なのです。何が一番不自然かというと、目線なのです。僕たちが普通に話しているときは普通に視線を動かしているのですが、カメラの前で目線を全然コントロールできていない。これが映像を見るとわかるのです。

本当の顔と記号化されたあとの顔、あるいはコード化されたあとの顔というのは、本当の顔などないという話が先ほど出ましたけれども、コード化される、もしくは記号化される一歩前の顔が、記号化されたときに、逆にあらわになると言えますか。

ですから、撮影されないで普通に話しているときは、別に目線はおかしくないのかもしれないのですが、カメラが一点に固定されて撮影されるという状況で初めて、視線がコントロールされていないことに気が付く。つまり、本当の顔というのが一個だけあって、それがいろいろ記号化されているのではなくて、ある種切り取られて送信されるような状況になったときに、初めて切り取られる前のものが自然なものとして、記号化される前のものでしてあることに気付く。記号化される前のもので記号化されたものが、常に対比されるような状況であるのだなど、すごく感じたのです。

まさに河野先生の話で、顔を持たない人は記号を持たないといえますか、伝える手段を持たないといえますか、そういう記号化されないものをずっと抱えて、他者とながるネットワークというのかOSというものを持たない状況で生きているのだらうなど。何が言いたいかというと、やはり顔というのは、いろいろな意味で記号だということですね。それは文化や政治によっても変わっていき、シチュエーションによっても変わっていく。切り取られる、

撮影されるなどということをするごく強く感じて、この問題はすごく広がりを持っているのだなということを思いました。

今の高橋さんの話で言うと、切り取られる一歩前というのは常にあつて。ですから、フレームで囲んだ瞬間に、それがあらわになるといふようなものではないかなと感じたということです。

(床島) 北山先生、はい。

(北山) 今の金沢さんの話は、私にとっては非常に刺激的です。というのは、本当の顔と、つくった顔（文化的に洗練された顔）と分けてもいいのですけれども、多分私たちは一こうやってここにいる人たちは一みんなそうだと思いますが、何らかの形でもって、文化的な学習を経てつくりあげた形での顔しか持っていないのです。そこに時々何らかの拍子に、それこそ今、放送大学での話をされましたけれども、そうではないような自分が、モグラミたいにちよこつと顔を出してくる。あるいは裂け目のような形で露呈する。それはたしかに非常にパーシャルな、部分的な形でしかないのだけれども、だからこそ本当の顔がそこに析出しているのではないかなどと思ったりします。これは非常に重要なことなのかもしれないと思うのです。

大阪に劇団態変という変わった劇団があります。「たいへん」というのは「変態」をひっくり返したもので、全員が身障者なのです。非常に重度の身障者で、物理的な移動も難しいような人が大半です。一四―一五名ぐらいが舞台でパフォーマンスを演じます。その人たちが舞台上で、「目を逸らすな」とばかりに、われわれを見据えるのです。非常に居心地が悪い。なぜ、居心地が悪くなるのか。それは、先ほどの「ラス・メニーナス」の話ではないですけれども、普段は見ている立場にいる自分が、逆の立場に置かれてしまうからだと思えます。私たちが無意識に安住している存在の在り様をその深部でもって、ひっくり返してしま

う、そういう力のあるパフォーマンスです。これは今、金沢さんが言われたことと非常に近いところであるのではないかと思います。この劇団のパフォーマンスは一回見ると、もう絶対に忘れません。シヨックを受けます。ぜひ行ってください。

(床呂) 北山先生、ありがとうございます。

他の方はいかがでしょうか。まだ多少何人かは大丈夫ですけれども、山口先生。

(山口) 個別的な質問なのですけれども、北山先生の話は、対立図式の話がすごく面白かったのですが。例えばマイノリティのそれぞれの話です。具体的に言いますと、ムスリムのヴェールを一度しなくなつて、また戻ってきたことが、何となく自分で選んだ感があります。また、特にどういう気持ちで選んだのかなという点で気になったのは、ムスリムのファッションショーがすごくきれいだったのですけれども、あれはどこが主催しているのですか。どういう感じで、ああいうファッションショーになつていったのかなというところがすごく気になりました。どういう文化的な気分というか気持ち感というか、盛り上がりがある中にはあつたのでしょうか。

(塩谷) ご質問をありがとうございます。あちらはハラールメディアジャパン社という、日本の会社が企画・運営をしている「ハラールエキスポジャパン二〇一六」で行われたものです。今、ムスリムの観光客の受け入れ、あるいはハラール産業ということで、日本から輸出していくという流れがあつて、その一環としてショーが行われたということになっていきます。シンガポールやインドネシアのデザイナーを招いて、日本で行いました。ということでは、あちらの方のものを、日本で紹介する。日本初のムスリムファッションショーと銘打つたのですが、日本の中で、これはちょっと主催側に確認したわけではないので分からないのですが、多分ヴェールのイメージといいますか、そういうところも含めて、伝えたかったということだったのかなと思います。

(山口) あれで印象とイメージが違っていて。でも、確かにやはりヴェールは一つ選ぶと、それがまた商売として、布を選んで着飾る一つの手段になりますよね。それを商売とすると、すごく大きなマーケットになるのかなと思いつながら、日本の会社にも商売として頑張っていたらいい。それをまた着飾る立場の選ぶ人たちもいて、その全体的な流れが非常に、自分がこれまで持ってきたヴェールのイメージとは違って、ヴェールに対するそれぞれの持っている印象が、昔とどんどん変わっていくという変化が分かって面白かったなと思いました。

(塩谷) ありがとうございます。

(床呂) では今、西井さんが手を挙げていたので。

(西井) すみません。私も部分的な質問と一つ感想なのですが、一つは大石さんのスライドの中で、大石さんの使用前・使用後のような写真があったのですが、あれは要するに別の方という意味なのですか。

(大石) あれは僕自身ですが、フィールドに行くのに三日ぐらいバスに乗っていくのですが、一日一八時間とか一五時間ぐらい乗るものから、その乗り継ぎがそのままスムーズに行く場合があるのです。つまりホテルで休まずに。それを三日ぐらい続けると、ああいう感じになるというので、講義のつかみでよく使うのですけれども。

(西井) 後というのは、つまりげつそりとした顔という？

(大石) ええ。その当時の普段の日本で宴会のときに撮った顔と、三日間、向こうでフィールドに着いた直後の顔というあれです。そういう私の顔を彼らがどのように受け止めているのだろうか分かってなくなってきたということが言いたかったです。高橋さんとお付き合いするようになって。

(西井) 分かりました。その次のお話にすぐ行かれたので。そうしたら、大石さんと間違わ

れる人と言うから、もしかしたら別の方なのかと。

(大石) いいえ、違います(笑)。

(西井) 分かりました、ありがとうございます。

感想なのですけれども、先ほどからずっと面白い議論が続いていて、仮面や括弧付きの囲われた顔と、その直前の顔やふと出る本当の顔という話、また自分の本当の顔を生まれてから自分では見られないという話もあったかと思うのですが、そうすると、ふと出る本当の顔というのは何の顔なのだろうなど。つまり、本当の顔というよりも、そこにあるのは変化でしかないのかもしれない。つまり人に見られる。この人に向けて見せる顔やここ(シンポジウム)で見せる顔、家族に見せる顔、一人で楽しいことを夢想している顔、悲しいことを思っている顔など。ですから、結局、本当の「顔」は、どこにもなく、またどこにでもありがたうございます。

先ほどの大石さんの使用前・使用后写真。使用ではないですけれども、あれで私もふと思出したのは、もう六年以上前だったと思うのですが、ロンドンに行ったときに、テート・モダンという現代美術館があるのですが、そこで面白いのは、イラク戦争に行くイギリス人の兵隊の顔写真を撮った写真展をやっていました。入隊前と除隊後をバツと比較するのがあって、もちろんあらかじめ事前に分かっているから、そういう物語性を読み込んでしまうというのが多分あるのですが、やはり圧倒的に違うのです。それとフィールド前と後の大石さんの顔というので、それを思い出したのです。

あと一つ、顔つながりで言いますと、私が最初に長期のフィールドワークをやったのは、先ほどもちよつと言ったかもしれませんが、一九九〇年代前半に三年間ほぼ、日本に一回も帰国しないで、ずっとフィリピン南部の、今はだいたい治安が悪くなってしまう、イス

チーム教徒の所で暮らしました。日本に三年ぶりぐらいに帰国したときに、その使用前・使用後の、逆パターンかもしれないのですが、忘れもしない、成田からエクスプレスに乗って、その中の日本人の皆さんの顔が、もう全然認識できないのです。「そうか、外国の方がよく言う、のつべりした表情のない日本人とは、こういうことだったのだ」というのがすごく分かりました。

ただ、家に帰りまして、そのころは親などと住んでいたもので、家族の顔はきちんと認識できて、のつべらぼう体験はなかったのですけれども。ですから、その逆のパターン、フィールドワークにおける一種の使用前・使用後ではないですが、そういうことをちよつと思ひ出しました。すみません、ちよつと余談になってしまいました。

あと一二人ぐらいは、まだ時間的には大丈夫ですけれども、いかがでしょうか。では、柿木先生。

(柿木) ご存じの方もたくさんおられるかと思うのですが、確かめた方がいいと思うのですが、今回の、あるいはこのテーマの顔と身体は、脳の中では顔の中枢というのは、非常に狭いところにぎつしりある。いわゆる顔認知中枢はご存じだと思います。そこをやられると、いわゆる失顔症や相貌失認が起こるのですが、最近は何に対してもやはり特別な場所があることが分かってきました。手を見る、足を見るなど、そのときに活動する場所が、顔認知中枢に非常に近いのですけれども、それが分かることができました。ただし、明らかに別のものであるということです。

ですから、僕たちは恐らく普通に生活して見ているときには両方見ているので、その顔認知中枢も身体中枢も動いているはずなのですが、顔があると圧倒的に顔の神経細胞が活動するので、身体の中核はほとんど活動しないのです。ですから、恐らくもう普通に、例えば今、僕は床呂さんを見ていますけれども、僕は顔しか見ていません。というところがある

のです。顔がなくなると、今度は体を見るのですね。

ですから、シルエットなど、先ほどの影絵などはもう恐らく身体中核だけで判断しているのです。ものすごくこれは効率のいい認知をするためにそうやってきたので、他の机やテーブルなどといったものは同じような脳の場所にあるのですけれども、非常にばらばらとあるので、机失認などは絶対ないわけです。身体失認ありません。身体中核もやはりかなり広い範囲にちよつとばらけています。ですから、手だけ分らないということには絶対にならないのですが、顔だけ特別にある。ただし、その周囲に身体中核も明らかに体の部分を見極める場所があるということが分かっていて、その二つだけが独立していて、あとはみんな他のいわゆるオブジェクトとしてしか見ていないということが分かってきました。すみません。せつかく盛り上がっているときに非常に堅い話で。

(床呂) 面白いご指摘ありがとうございます。

いかがでしょうか。あと一人、短ければ二人ぐらいは大丈夫かもしれません。よろしいでしょうか。では、山口先生。

(山口) はい。では最後に今回の感想といえますか、前回の会合と比べると、原島先生におっしゃっていただきましたように、今回は高橋先生に入っていただいて、実際に心理学と文化人類学が交流しているところも分かりました。また、今回と前回の二回を踏まえてみますと、特にヴェールやバリ舞踊の中で、こういう調査や実験もしてみたいなという意欲が、少しずつ湧きつつ、きつとこの関係やコラボレーションがどんどんできていくのではないかなという気持ちで聞くことができました。

また、コメンテーターのお三方からコメントいただいて、あまり意識はしていなかったのですが、今回二回重ねることによって、何となくですが、グローバルとローカル、マイノリティ、それがどのように絡み合って今ある「顔」になっていたり、未来の「顔」になって

いったり、私たちが顔に対して、身体に対して抱くイメージというのは変わっていくのか、そういう方向性が何となく見えてきたように思えました。ある方向性を持って、この領域といますか、このテーマは進んでいけるような気がしてきました。また今回、柿木先生からもコメントいただきましたように、身体と顔と、それぞれの脳の関係というところからも、また突き詰めていけるのではないかなと思いました。

大変興味深い時間を頂きまして、皆さんご参加いただきましてありがとうございます。今回支えていただいた床呂先生と西井先生にも本当に感謝して、また次回も続けていけたらなと思いますが、その点はどうでしょうか。

(床呂) はい。その辺はボスの西井涼子さんに訊いてみないと分かりませんが、本当にありがとうございます。

また、今お話がありました、科研自体はどのようになるかというのはもちろん分かりませんが、どうなるかというのとは別として、またこういう機会をぜひ続けていければと私どもも思っていますので、ぜひこちらこそよろしくお願いいたします。

基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求―人類学におけるミクロマクロ系の連関2」とは

基幹研究人類学班では二〇一六年度から、アジア・アフリカにおけるグローバル化や近代化に伴う現代的諸問題への対処という課題をふまえ、研究テーマ「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求」を展開する。この研究テーマは、「アジア・アフリカ地域の諸問題の正確な理解に基づき問題解決に貢献するとともに、その研究成果を国際的に発信する」というAA研の中・長期的目標に照応するものであり、現代社会の抱える喫緊の課題に対処するものである。

グローバル化や近代化については、欧米中心的な理解では把握できないリスクやハザードが世界各地において現在進行中である。すなわち、人には御しがたい狭義の自然的災害のみならず、各種の紛争、環境変動、人口変動（限界集落問題など）、経済危機も含む、生活全体が脅威に晒される状況である。こうした状況が昂じるにつれ、理性に基づく近代的テクノロジーによって、政治・経済・社会的事象はもろんのこと、自然現象さえも人間にとって好ましい方向にコントロールしうるとの認識が、さまざまな地域において複数の異議申し立てに直面し、それに有効な答えや対処法を提示できずにいる。

本基幹研究では、このような硬直した事態に対応するため、それぞれの地域に根付いたやり方Ⅱ「在来知」の可能性をあらためて検証することを提唱する。多くの人類学者が明らかにしてきたように、アジア・アフリカの日常生活において人々は、「在来知」を駆使して新たな現実に柔軟に対処している。しかしながら、その多様な「在来知」は個別の文脈に留め置かれ、広範な知的影響力を獲得するに至っていない。

こうしたアジア・アフリカの「在来知」を、本基幹研究が「人類学をめぐるマイクロ・マクロ系の連関」という主題のもとで整備してきた理論的・方法的地平から捉えなおし、リスク・ハザードに対処する人類の知を統一的に構想することが本研究テーマの目的である。こうして得られた「リスク・ハザードに対処する在来知」をめぐる知見は、日本を含む世界のどこにおいても検証や適応が可能である。基幹研究に集う人類学研究者の使命とは、アジア・アフリカからの「在来知」の個別を越えた多様な状況への適応可能性に道を拓き、国内外に向けて発信し、アジア・アフリカの諸問題の解決に寄与することであるにちがいない。

トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築
基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求
—人類学におけるミクロマクロ系の連関2—」
二〇一六年度 公開シンポジウム

編 集…床呂郁哉

編集補佐…古谷伸子、郷田りか

発 行…東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の
可能性の探求—人類学におけるミクロマクロ系の連関2—」

〒一八三―八五三四 東京都府中市朝日町三―一―

TEL 〇四二―三三〇―五六〇〇

FAX 〇四二―三三〇―五六一〇

ホームページ <http://www.aatufs.ac.jp/kikanjinrui/>

発 行…二〇一七年三月二三日

表紙デザイン…中村恭子

印刷・製本…株式会社ワードオン

〒三三五―〇〇〇四 埼玉県蕨市中央七―五六―三

